第３章　四国・中国・北九州における土器・陶磁器の様相

はじめに

前章において、近畿の土器・陶磁器の産地別組成と用途別組成から、Ⅰ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡、Ⅳ集落型遺跡など４類型に分類し、その特徴を述べた。

近畿以外の西日本では、広島城跡、高松城跡などの城郭を中心とし、近年では宿場町や集落跡でも僅かに調査が行われている。しかし、層位的に実施する遺跡となると少なく、近世を通して土器・陶磁器の変遷を研究する例は、近畿より少ない。

そのなかで本分析方法によって 20 遺跡の計測分析を試みた。その分析結果、土器・陶磁器の産地別組成と用途別組成から、各遺跡の特徴を明らかにし、さらに近畿の４類型の遺跡と比較検討した結果、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅳ集落型遺跡が存在し、これら以外の３類型があることがわかり、それらをⅡ－２城下町型遺跡、Ⅳ－２集落型遺跡、Ⅴ貿易都市型遺跡と名付けた。

本章では西日本の遺跡数が少ないため四国・中国・北九州と地域にわけて、分析結果を述べ、最後の第４節においてこれら５類型を比較し、四国・中国・北九州における土器・陶磁器の様相を論じることにしたい。

第１節　四国における土器・陶磁器の様相

四国には、近世を代表する遺跡として高松城跡、徳島城下町跡などが挙げられる。これらは広域かつ層位的に調査が実施されるが、それ以外では複合遺跡で近世遺構を検出し、その様相が述べられる。その中で、高松城跡、徳島城下町跡、小籠遺跡で計測分析することができた。ここではその分析結果と、各遺跡の特徴やそれに類似する遺跡を検討する。

１　高松城跡（第 93 図 - １）

①　16 世紀末～17 世紀前期

高松城跡は、江戸時代は讃岐国、現在は香川県高松市に所在する。発掘調査は、武家屋敷跡を主に行われ、ここからは良好な一括資料が多く検出し、それらの分析と遺物の編年がわかっている。今回は、そのうちの一部資料を再度計測分析した。

本時期の良好な資料として SK b 192 がある。産地別組成を比率の高い順に配列すると、

肥前陶器 45%、土師質土器 34%、備前焼 13%、中国製磁器５%、瀬戸美濃陶器３%と続く（第 94 図)。用途別組成は食膳具 74%、調理具 17%、調度具６%、貯蔵具３%と食膳具が半数以上を示す（第 95 図)。

産地別組成で高い比率を示すのは肥前陶器である。但し、同時期の SX８A05 や SX８D209 では土師質土器が高い比率を示し、本時期においては土師質土器が主体であると思われる。肥前陶器の主な器種は碗・皿などの食膳具で、その組成をみると肥前陶器 55%、土師質土器 21%、中国製磁器 16%、瀬戸美濃陶器８%と、高い比率を示す（第 96 図)。品質は量産品が多いが絵唐津の「桃山陶器」に分類される高級品の皿・鉢なども出土する。

肥前陶器に次ぐのは土師質土器である。先に述べたように、本時期では産地別組成において主体である。器種は皿と鍋類が出土する。これらの胎土の色調や成形方法から、いくつかに分類できるが､各タイプは広域に分布しておらず､したがって在地産と考えられる。皿は痕跡から灯火具での使用が多い。鍋類は耳付き鍋と羽釜があり、分類では焙烙にしたが後世に出土するものとタイプが異なる。その他に擂鉢や火鉢などがある。

焼締陶器は備前焼のみである。擂鉢・甕を主体とし、徳利・鉢などは「桃山陶器」に分類される製品も含まれる｡擂鉢は調理具組成をみると土師質土器20%に対して備前焼20%と、在地産と拮抗する（第 97 図)。

土師質土器に続くのは中国製磁器で、皿・鉢が出土する。食膳具組成では肥前陶器と比率値に大差がある。同時期の SX８A05 では 10%出土しており、このことから一定量はあると思われる｡碗は景徳鎮窯､皿は漳州窯の製品でいずれも青花である｡瀬戸美濃陶器は、産地別組成での比率は低いが食膳具が出土する。品質・器種は粗雑な作りの量産の皿・鉢は少なく、多くは茶器や懐石具など「桃山陶器」に分類される志野焼や織部焼などが目立ち、天目碗などもある。

このように中国製磁器や瀬戸美濃陶器、先に述べた肥前陶器などの施釉陶器・磁器は産地別組成で 53%と半数以上を示す。また、これらの主な器種は食膳具であり、その組成において 79%の値であるとから、施釉陶器・磁器の影響により用途別組成で食膳具の比率が高い値を示したと考えられる。また、この様相は施釉陶器・磁器の食膳具を日用器として受容した現れと思われる。

四国において、同じ様相を示す遺跡として同じ城下町跡である高知県の高知城跡、徳島県の徳島城下町跡などが挙げられる。

16 世紀末～17 世紀前期の高松城跡の産地別組成でもっとも高い比率を示すのは土師質

土器で、これに肥前陶器・中国製磁器などの施釉陶器・磁器が続き、焼締陶器の比率が低く、用途別組成では食膳具が高い比率を示した。このような諸点は、近畿のⅠ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡と共通する。但し、高松城跡では貿易陶磁器が５％であるが、Ⅰ都市型遺跡では20～30％と高い比率で、さらに、Ⅰ都市型遺跡では高級陶磁器が突出して高い比率を示す例があるが、本遺跡ではみられない。この貿易陶磁器の比率はⅡ城下町型遺跡では10％であることから、この類型とも異なり、その特徴はⅢ在郷町型遺跡と共通する。しかし、施釉陶器・磁器の食膳具が 50％以上出土することや、「桃山陶器」に分類される懐石具や茶器が一定量出土するなど、Ⅱ城下町型遺跡の特徴を多く示すことから、本遺跡をⅡ－２城下町型遺跡に類型した。

② 17 世紀後期～18 世紀前期

本時期の資料として西の丸町（H7・８）８A・C 区Ⅱ層がある。産地別組成をみると土師質土器 39％、肥前磁器 33％、肥前陶器 12％、備前焼９％、京焼系陶器 5.2％、瀬戸美濃陶器 0.6％、堺・明石焼 0.5％、中国製磁器 0.3％、瓦質土器 0.2％、軟質施釉陶器 0.2％と続く（第 94 図）。用途別組成は食膳具 69％、調度具 14％、調理具 13％、貯蔵具４％と食膳具が依然として高い比率を示す（第 95 図）。

出土量が多いのは土師質土器である。しかし、本遺構では焙烙の破損が著しいため高い比率を示したが、個体数では肥前磁器をやや下回る。主な器種は皿・焙烙・焜炉類である。皿は灯火芯を残すものもあるが多くは食膳具として使用する。焙烙は讃岐産が主体である。火鉢は調度具組成で 30％と高い比率を示す（第 99 図）。

土師質土器に続くのは肥前磁器である。本遺跡における出現時期は 1620～1630 年代と考えられる遺構から出土し、この時期には流通していたが出土量はごく僅かである[1]。SK b 178 は 17 世紀中期の廃棄土坑で、その産地別組成をみると土師質土器 46％、肥前磁器 17％、備前焼 14％、肥前陶器 11％、中国製磁器６％、瀬戸美濃陶器３％、瓦質土器１％、信楽焼１％と（第 94 図）、陶磁器では高い比率を示す。主な器種は食膳具で、その組成では土師質土器 38％、肥前磁器 32％、肥前陶器 18％、中国製磁器 10％と続き（第 96 図）、肥前磁器は 16 世紀末～17 世紀前期で主体であった肥前陶器を大きく上回り、土師質土器と競合する。８A・C区Ⅱ層の食膳具組成では肥前磁器 41％、土師質土器 37％、肥前陶器

[1]日下正剛･浜田恵子・松本和彦「四国地方」『国内出土の肥前陶磁器　西日本の流通をさぐる第二分冊』　九州近世陶磁学会　2002 年

16%、京焼系陶器５％、中国製磁器１％とさらに比率が上昇しており、この増加によって産地別組成で高い比率を示すと思われる。品質は「くらわんか手」などの量産品３に対して、有田町で生産された高級品２と量産品が中心である。

肥前磁器に続くのは肥前陶器で、本時期でも碗・鉢などが多く、このうちで呉器手・京焼風陶器などの碗類は前代より出土量が増える。食膳具の主体は肥前磁器に移行するが、この状況から一定量保持していたと考えられる。

施釉陶器は他に、京焼系陶器が本時期から出現する。主な器種は碗で、食膳具組成をみると６％を示し（第 96 図）、同じ施釉陶器の肥前陶器碗が９％であることから、出現とともに一定量出土することがわかる。京焼系陶器碗は丸碗・筒型碗などで、その形態から喫茶碗に分類され、喫茶碗を主に受容されていた。瀬戸美濃陶器は鎧碗や天目碗などの碗類が僅かに出土し、前代まで出土した「桃山陶器」に分類される高級食膳具はみられない。

焼締陶器は、備前焼が高い比率を示す。主な器種は前代に引き続き擂鉢・甕で、本時期から灯火具が出現する。調度具組成では灯火具 25%と高い比率を示し、前代まで主体であった土師質土器を大きく上回る（第 99 図）。擂鉢は調理具組成で 30%と依然として多く、新たに堺・明石焼が出現するが４％と僅かである（第 97 図）。

四国において、同じ様相を示す遺跡として徳島城下町跡が挙げられる。

17 世紀後期～18 世紀前期の高松城跡では、前代に比べて土師質土器が減少し、それに変わって肥前磁器が主体となる。用途別組成も調度具の器種が増え比率を上げるが、依然として食膳具が中心である。この点は近畿のⅡ城下町型遺跡と共通する。また、肥前磁器の増加する時期が 17 世紀後期からであること、堺・明石焼、京焼系陶器などの出現時期、有田町で生産された高級品の割合なども共通する。さらに、焼締陶器の主製品も遺跡近郊の産地がそれらの市場を独占することも同じであり、したがって、本時期の高松城跡は、Ⅱ城下町型遺跡と同一類型に認められる。

③　18 世紀後期～19 世紀前期

この時期の資料として文政４年（1821）の火災関係資料がある。西の丸町ＳＫｂ63 の産地別組成では土師質土器 43.5%、肥前磁器 21%、備前焼 11%、軟質施釉陶器 9.5%、京焼系陶器８％、肥前陶器 2.5%、瀬戸美濃陶器２％、信楽焼 1.8%、堺・明石焼 0.7%と続く（第 94 図）。用途別組成は食膳具 34%、調理具 36%、調度具 26%、貯蔵具４％と食膳具と調理具が拮抗する（第 95 図）。

本時期でも土師質土器が高い比率を示すが、これは焙烙の破損が激しかったためで、個体数値は前代より下降し 20%で、肥前磁器が 50%を示す。主な器種は皿・羽釜・焙烙・火鉢である。皿は食膳具・調度具ともに前代より比率が下がる。その一方で、焙烙は依然として多く、調理具組成で 68%と比率が高い。成形技法から讃岐産が主であるが僅かに難波分類Ｆ類が出土する。また、火鉢・焜炉類も前代より増加しており、これによって一定量保持すると思われる。

前代と変わりなく肥前磁器は高い比率を示しており、食膳具組成では肥前磁器 51.5%、京焼系陶器 18.5%、肥前陶器７%、瀬戸美濃陶器２%と依然として出土量が多い（第 96 図)。品質は「くらわんか手」などの量産品３に対して、有田町で生産された色絵や染付の食膳具・調度具２で、前代と変わりない。碗は広東碗・望料碗・端反碗と器種が豊富である。

焼締陶器の備前焼も前代と同様に高い比率を示す。主な器種は灯火具・徳利である。前代まで多く出土した擂鉢は調理具組成をみると、堺・明石焼３%、備前焼 0.5%と主体が堺・明石焼に移行する（第 97 図)。この変化は 18 世紀中期から確認でき、ＳＫ08・09 の調理具組成では堺・明石焼１%、備前焼 0.2%と続く組成であった。また、甕も同じで在地産と考えられる軟質施釉陶器 58%と高い比率で、備前焼は６%と僅かとなり、本時期には擂鉢・甕は備前焼から他産地に主体が移行することがわかった。しかし、産地別組成で高い比率を示すのは灯火具によるもので、本時期にはこれが主製品となる。

京焼系陶器は施釉陶器のなかで比率が高い。食膳具の碗、調理具の土瓶、調度具の灯火具・文具など豊富な器種である。ことに碗は 18 世紀中期から上昇し、肥前磁器に次いで高い比率を示し、本時期でもその組成に大きな変化はない。

この要因について、北条ゆうこ氏[2]や日下正剛氏[3]の研究が詳しい。高松城跡と隣国である徳島城下町跡では正月の八賀に「大バク茶」を嗜むことが武家社会で流行し、その際に使用するのが注連縄と海老文様を施した京焼碗であり、京都の窯元に特注して作らせたことも文献資料で明らかである。それが 18 世紀中期には武家社会のみならず、町屋や農村集落でこの注連縄と海老文様を施した京焼・京焼系陶器碗が出土し、日常的にも嗜まれたと考えられている。

---

[2] 北条ゆうこ「阿波の注連縄茶碗」『考古学調査会』徳島県立博物館 1997 年

[3] 日下正剛「新蔵町１丁目遺跡出土の注連縄文茶碗」『新蔵町１丁目遺跡　企業局総合管理事務所地点Ⅱ』徳島県教育委員会　財団法人　徳島県埋蔵文化財センター2000 年

また、京焼系陶器の土瓶は、調理具組成によると軟質施釉陶器 22%、京焼系陶器 1.4%となり（第 97 図)、前代より施釉陶器の土瓶の比率が上がる。これら煮沸具は用途別組成にも影響を与え、食膳具と近接した値まで上昇する。この増加は言うまでもなく、喫茶習慣による変化と思われる。

四国において、同じ様相を示す遺跡として徳島城下町跡が挙げられる。

18 世紀後期～19 世紀前期の高松城跡は、産地別組成で肥前磁器を主体とし、施釉陶器・磁器が続き、そのなかで京焼系陶器は急増する。この京焼系陶器の主な器種は碗と土瓶で、特に後者の影響で、用途別組成において食膳具と調理具が拮抗する値となる。これら様相はⅡ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡と共通する。また、甕の主産地について、近畿では遺跡近郊の製品を主に受容し、窯場がない場合は多産地が拮抗したが、高松城跡では在地産の軟質施釉陶器甕が主体であることから、その様相も同様である。したがって、この時期の本遺跡はⅡ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡と同一類型と見ることができる。

但し、近畿の遺跡ではタイプに関係なく、京焼系陶器の煮沸具は土瓶以外に鍋があり、これも本時期に急増する。しかし、高松城跡では鍋は僅かであり、喫茶具以外での受容差があることが判明した。

以上、高松城跡、徳島城下町跡などの四国地方の城郭遺跡は、16 世紀末～17 世紀前期はⅡ城下町型遺跡に共通点が多いものの、貿易陶磁がⅢ在郷町型遺跡に類似するためⅡ－２城下町型遺跡としたが、17 世紀後期～18 世紀前期にはⅡ城下町型遺跡と同類型となった。さらに、18 世紀後期～19 世紀前期にはⅡ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡と同類型となる。

２　その他の遺跡

四国地方では、高松城跡・徳島城下町跡以外に近世を通して状況がわかる遺跡は少ないが、いくつかの集落遺跡で様相がみることができた。さらに高知県の小籠遺跡は（第 93 図‐７)、18 世紀後期以降の遺構内・外を含めて遺物の検討がされており、このうち 18 世紀後期～19 世紀中期の資料については自ら計測分析することができた。この計測分析の結果も含めて検討する。

①　16 世紀末～17 世紀前期

本時期の資料は乏しく、香川・徳島県の城下町や交通の拠点以外は遺構自体が少なく、

よって土器・陶磁器の組成は明らかにできない。計測分析資料ではないが香川県高松市の東山崎・水田遺跡、徳島県三好町の土井遺跡などの集落跡を検討すると、遺物の全体量が少なく、それが特徴である可能性もあるが、遺構によって組成が大きく変動する。

産地別組成は土師質土器を主体とし、それに備前焼が続き、僅かに肥前陶器が出土する組成である。用途別組成は調理具・貯蔵具が多く、これに食膳具が続く。

土師質土器の主な器種は皿・鍋類である。これらの胎土・成形方法からいくつか分類でき、その分布範囲から在地産と思われる。皿は、灯火芯を残すものもあるが、多くは食膳具として使用したと考えられる。鍋は東山崎遺跡・水田遺跡では羽釜が主体である。また、高松城跡では耳付き土鍋が多く出土したが、本遺跡ではなかった。徳島の土井遺跡では土師質土器鍋はほとんど出土しない。

焼締陶器は両遺跡とも備前焼のみであった。主な器種は擂鉢・甕で、但し、東山崎・水田遺跡では土師質土器擂鉢と拮抗する。

肥前陶器は、先の製品と比べると出土量は少ない。器種は皿で僅かに碗がある。品質は胎土目・砂目積みなどの目痕を残す量産品が大半で、東山崎・水田遺跡では絵唐津皿がごく僅かに出土する。肥前陶器の出現時期がわかる遺跡例はない。初期の製品とされる岸岳系はなく、胎土目積みが出土することから、16 世紀末～17 世紀前期に流通し始めたと思われるが、出土量は少ない。

本時期の両遺跡は、遺物の全体量が少なかった。産地別組成は土師質土器を主体とし施釉陶器・磁器は僅かである。用途別組成は食膳具が少なく、調理具・貯蔵具が多い組成で、これら様相は近畿では共通する例はない。近畿の遺跡でも土師質土器が主体だが、全体的に陶磁器の出土量が多い。特に施釉陶器・磁器はⅠ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡では高い比率を示しており共通性が認められない。Ⅲ在郷型遺跡と貿易陶磁器や「桃山陶器」などの高級品がごく僅かに出土することは類似するが、産地・出土量ともに少なく共通性は少ないと考えられる。したがって、東山崎・水田遺跡、土井遺跡は近畿に同類型がなく、これら一群をⅣ－２集落型遺跡と新たに類型化する。

② 17 世紀後期～18 世紀前期

この時期も良好な遺構は少なく、計測分析資料ではないが香川県丸亀市郡家の田代遺跡 SKⅡ11（第 93 図‐４）、同県高松市中間西坪遺跡 SK09（第 93 図‐２）など、前代に引き続き集落遺跡の出土状況を検討する。

産地別組成は出土量が多い順から配列すると、土師質土器、備前焼、肥前陶器、肥前磁器、堺・明石焼と続く。用途別組成は調理具、食膳具、貯蔵具、調度具にわかれる。

土師質土器の主な器種は前代と変わりなく皿・鍋類で、この他に甕が新たに出現する。皿は灯火芯を残すものが多く、食膳具としての使用も継続する。焙烙・鍋などの鍋類が多く出土し、これにより調理具の量比が増え、その特徴も前代の東山崎・水田遺跡と変わらない。甕は本時期から増加し、貯蔵具組成で備前焼甕と競合する。

備前焼は擂鉢・甕・灯火具が出土する。擂鉢は前代では本産地が独占したが、本時期より堺・明石焼が僅かに出土し始める。甕は先に述べた通りで他産地と競合する。また、備前焼灯火具が出現するが出土量は少ない。

肥前陶器は 17 世紀代の胎土目積み・砂目積み皿が出土するが、内野山窯で生産された碗や鉢などの量産品が主に出土する。碗の装飾は刷毛目碗が大半で、これに呉器手碗・陶胎染付碗も出土する。また、高松城跡や徳島城下町跡で一定量出土した京焼風陶器碗はほとんどみられない。鉢の装飾は刷毛目や三島手である。

肥前陶器に続くのが肥前磁器である。正確な量比は示せないが、肥前陶器 7 に対して肥前磁器は 3 と少ない。器種は碗・皿などの食膳具が多く、調度具はほとんどない。また、肥前磁器の出現時期については、高松城跡以外では不明である。分布状況を見てみれば初期伊万里の分布は城下町に集中し、次に出現する腰張筒型碗は集落遺跡などで出土するが少ない。多くみられるのは本時期に出現する「くらわんか手」であり、四国では 17 世紀後期～18 世紀前期に広く流通したと考えられる。2 遺跡から出土した碗・皿のタイプをみると、有田町で生産された高級品はなく、長崎県波佐見町周辺で生産された量産品の「くらわんか手」が多い。肥前陶器・肥前磁器などの施釉陶器・磁器の出土量は、前代ではごく僅かであった。本時期においては土師質土器とこれら施釉陶器・磁器が二分すると思われる。したがって、本時期に肥前陶器・肥前磁器が急増することがわかり、これらを日用器として使用し始めた現れと考えられる。

他に、高知県南国市の小籠遺跡、香川県高松市の空港跡地遺跡などの集落跡が同様の様相を示す。

17 世紀後期～18 世紀前期の 2 遺跡の産地別組成は、前代と変わりなく土師質土器を主とする組成で、これに焼締陶器や肥前陶器が続く。また、堺・明石焼が本時期から出現する。用途別組成は調理具を中心に食膳具・貯蔵具が出土し、調度具はごく僅かであった。これら様相はⅣ集落型遺跡と類似するが、Ⅳ集落型遺跡では産地別組成で肥前磁器が高い

比率を示し、これを含む施釉陶器・磁器の比率が 68%と半数以上を示すが、四国の２遺跡では 40%未満であった。さらに施釉陶器・磁器の主な器種は食膳具であり、Ⅳ集落型遺跡より受容が少ない傾向にあることがわかる。したがって、取り上げた集落跡は前代と同様に近畿では共通する遺跡がなく、これら四国の集落跡は前代に引き続きⅣ－２集落型遺跡に類型する。

③　18 世紀後期～19 世紀中期

本時期の資料として小籠遺跡が挙げられる。本遺跡は高知県南国市に所在する農村集落遺跡である。遺構の年代観は長期だが、本時期の特徴を示すと考え、計測分析をおこなった。産地別組成を比率の高い順に配列すると、肥前磁器 46%、肥前陶器 24%、土師質土器 10%、軟質施釉陶器７%、瀬戸美濃磁器 5.7%、瀬戸美濃陶器４%、瓦質土器 1.7%、丹波焼 0.05%、堺・明石焼 0.05%、京焼系陶器 1.5%と続く（第 108 図）。用途別組成は食膳具 60%、調理具 25%、調度具 13.5%、貯蔵具 1.5%にわかれる（第 109 図）。

産地別組成で比率が高いのは肥前磁器である。主な器種は碗・皿で、食膳具組成をみると 57%と高い比率を示す（第 110 図）。品質は有田町で生産された高級品が１に対して量産品４と、後者が主体であるが本時期から高級品が出土する。この他に仏飯具や化粧具などの調度具が 18%を占め、食膳具以外の製品も増加する。また、肥前磁器に分類した中には砥部焼や西岡焼、富田焼など肥前磁器の技術的系譜を引く四国の磁器窯の製品も多く含まれる。特徴的な体部に螺旋文に亀甲文や草文を施した碗類は識別が可能であるが、これら以外は困難であるため同類とした。

次に続くのは肥前陶器である。食膳具が主体で、その組成で 14%の比率を示し（第 110 図）、肥前磁器に次いで多く出土する。食膳具以外に土瓶・土鍋などの煮沸具があり、調理具組成で 25%と擂鉢に次いで高い比率である（第 111 図）。これら煮沸具は 18 世紀後期以前では出土しておらず、本時期に急増し、調理具組成に変化をもたらす。また、肥前陶器に分類した中には肥前陶器の技術的系譜を引く高知県の尾戸焼製品が多く含まれる。

土師質土器は皿・焙烙・火鉢・焜炉類が出土する。このうちで火鉢や焜炉類などの大型製品が多く、前代にみられた皿・鍋類から主製品が変わる。

焼締陶器は堺・明石焼の比率が高い。主な製品は擂鉢で、調理具組成では 35%とこれのみである（第 111 図）。他に丹波焼が出土する。器種は甕で、本遺構ではこれのみであったが、他からは備前焼、肥前陶器などが出土する。

施釉陶器は他に、京焼系陶器、瀬戸美濃陶器がある。京焼系陶器は灯火具、調理具を主体とし、碗・火鉢など豊富な器種組成である。また、この中には在地に点在する京焼の技術的系譜を引く窯製品も含まれる。特に、灯火具や調理具を観察すると、大坂城跡や伊丹郷町遺跡などで出土する製品と比べると、器厚・釉厚が厚く、釉薬に透明度がない。このことから地元産の可能性が高いと考えられる。その一方で、碗類の上絵付けした製品については近畿の遺跡から出土する製品と類似する。瀬戸美濃陶器は碗や水鉢・火鉢などの大型製品が出土する。

本様相と共通する遺跡として、他に香川県高松市の空港跡地遺跡がある。

18 世紀後期～19 世紀中期の本遺跡の産地別組成は、肥前磁器が高い比率で、土師質土器・焼締陶器が施釉陶器・磁器より低い値を示す。また、食膳具組成において肥前磁器が高い比率を示し、これを主に日用器として受容することや、擂鉢は堺・明石焼が主体であること、甕は多産地が拮抗することなどはⅡ城下町型遺跡、Ⅲ在郷型遺跡、Ⅳ集落型遺跡と概ね類似する。しかし、肥前陶器が本遺跡のように高い比率を示す様相は近畿の遺跡ではない。これは在地の尾戸焼が含まれるためであり、そのようなことから近畿における京焼系陶器の様相と共通すると思われる。ただ、尾戸焼の増加も碗・煮沸具によることは同じだが、その組成はⅡ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡と比べると比率値が低い。さらに有田町で生産された高級食膳具の割合も先の２類型遺跡より少なく、本遺跡の様相はⅣ集落型遺跡と共通する。したがって、本時期の小籠遺跡はⅣ集落型遺跡と同一類型に属するとみることができる。

第２節　中国における土器・陶磁器の様相

中国地方の近世遺跡は、瀬戸内海沿いに多く点在するが、近年、日本海側でも活発に調査し始めている。その中で、いくつかの遺跡・遺構を計測分析することができた。ここではその分析結果と近畿の４類型遺跡と比較検討し、各遺跡を分類しその特徴を述べる。

１　広島城跡（第 114 図 - １）

①　16 世紀末～17 世紀前期

本遺跡は、江戸時代は安芸、現在は広島県広島市に所在する。広島城は天正 17 年（1589）に毛利輝元によって築城され、慶長６年（1601）に福島正則が入城後も整備され続けられた。

本時期の資料としてSD２が挙げられる。産地別組成を比率の高い順に配列すると、土師質土器45%、肥前陶器32.69%、上野・高取焼７%、備前焼６%、中国製磁器５%、瀬戸美濃陶器３%、丹波焼1.3%、軟質施釉陶器0.01%と続く（第115図）。用途別組成は食膳具83%、調理具13%、調度具４%、貯蔵具３%にわかれる（第116図）。

産地別組成で高い比率を示すのは土師質土器で、主な器種は皿で80%と出土量が多い。その他に焼塩壷・焙烙・焜炉が出土する。これらの胎土の色調、成形方法からいくつかに分類でき、それらの分布状況から多くは在地産と考えられる。

土師質土器に続くのは肥前陶器である。主な器種は皿で、これに碗・鉢・擂鉢・甕などが出土する。このうち食膳具組成では土師質土器48%、肥前陶器40%、中国製磁器６%、瀬戸美濃陶器４%、上野・高取焼１%と続き（第117図）、施釉陶器・磁器では本産地が多く出土する。品質は皿・鉢は粗雑な作りの量産品３に対して、絵唐津などの高級品２で、高級品も一定量含む。

上野・高取焼は、本遺構では擂鉢の破損が激しく高い比率であったが、同時期と考えられるSK56では１%を示し、後で述べる中国製磁器や焼締陶器より低い比率である。器種は碗・皿・鉢などの食膳具が主体で、擂鉢・瓶類なども僅かに出土する。

焼締陶器で高い比率を示すのは備前焼である。主な器種は擂鉢と甕で、調理具組成では備前焼22%、丹波焼９%、肥前陶器４%、上野・高取焼２%と続き（第118図）、備前焼が主体である。甕は貯蔵具組成で備前焼18%、肥前陶器８%とこれも高い比率を示す（第119図）。したがって、本時期における擂鉢・甕の主産地は備前焼である。焼締陶器は他に丹波焼があり、大平鉢が僅かに出土する。

備前焼に続くのは中国製磁器である。主な器種は皿で、食膳具組成では６%と少ないが景徳鎮窯・漳州窯の青花が出土する（第117図）。施釉陶器・磁器は、他に瀬戸美濃陶器がある。粗雑な作りの量産品は少なく、「桃山陶器」に分類される志野焼や織部焼などの懐石具・茶器が出土する。

また、これら施釉陶器・磁器は共通して主器種が食膳具である。その組成では土師質土器が高い比率だが、これら施釉陶器・磁器が52%を示すことから、これらを日用器として主に受容したと考えられる。

中国地方において本遺跡と同じ様相を示す遺跡として、岡山県岡山市の岡山城跡・二日市遺跡銭座跡、島根県の富田川河床遺跡が挙げられる。

16世紀末～17世紀前期の広島城跡の産地別組成で最も高い比率を示すのは土師質土器

で、これに肥前陶器・上野・高取焼などの施釉陶器・磁器が続き、焼締陶器の比率が低く、用途別組成は食膳具が高い比率を示した。このような諸点は、Ⅰ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡と共通する。但し、広島城跡では貿易陶磁器が５％であるが、Ⅰ都市型遺跡では 30～20％を示しており、さらに、Ⅰ都市型遺跡は高級陶磁器が突出して高い比率を示す例があるが、本遺跡ではみられない。この貿易陶磁器の比率はⅡ城下町型遺跡とも差異がみられ、本遺跡と共通するのはⅢ在郷町型遺跡である。しかし、施釉陶器・磁器の食膳具が 52％出土すること、「桃山陶器」の懐石具や茶器が一定量みられる点はⅡ城下町型遺跡の特徴を多く示すことから、Ⅱ－２城下町型遺跡と同一類型に属すると考えられる。

② 17 世紀後期～18 世紀前期

本時期の資料として SK39 が挙げられる。産地別組成は土師質土器 61％、肥前磁器 23％、肥前陶器７％、京焼系陶器６％、中国在地陶器４％、備前焼 1.8％、瀬戸美濃陶器 1.6％、中国製磁器 0.6％、堺・明石焼 0.05％と続く（第 115 図）。用途別組成は調理具 57％、食膳具 33％、調度具７％、貯蔵具３％にわかれる（第 116 図）。

本時期においても土師質土器が高い比率を示す。但し、本遺構では焙烙の破損が著しいため高い数値で現れたが、個体数では 48％を示す。また、同時期とする SK55 では肥前磁器 52％、土師質土器 16％を示し、前代より出土量が減少する。器種は本遺構では皿のみだが、SK55 では焙烙・焼塩壷・ミニチュア土製品が出土する。

肥前磁器は先に述べたが産地別組成で高い比率を示す。本遺跡における肥前磁器の出現時期は 17 世紀前期～17 世紀中期と考えられている[4]。この時期とするＳＫ45 の産地別組成では、土師質土器 50％、肥前陶器 22％、備前焼９％、肥前磁器９％、瀬戸美濃陶器５％、中国製磁器３％と続き（第 115 図）、本産地は肥前陶器と比べると出土量が僅かである。続く 17 世紀後期～18 世紀前期とするＳＤ３の産地別組成では、土師質土器 42.2％、肥前磁器 25％、肥前陶器 18％、備前焼 10％、上野・高取焼 1.6％、萩焼 1.6％、京焼系陶器 1.6％と、前代まで施釉陶器の主体であった肥前陶器を抜いて高い比率を示し、この時期に増加したと考えられる（第 115 図）。

本遺構では食膳具の碗・皿を主に、仏飯具・香炉などの神仏具・合子や蓋物などの調度

[4] 福原茂樹・篠原達也「広島県における肥前陶磁器の出土状況について」『国内出土の肥前陶磁器　西日本の流通をさぐる第１分冊』　九州近世陶磁学会　2002 年

具が出土する。また、碗・皿は食膳具組成では36%を示し（第117図）、前代のSD03では30%であり、僅かに増加している。品質は有田町で生産された色絵や染付の高級食膳具２対して、「くらわんか手」とよばれる量産品３と高級品も一定量含む。また、調度具は前代より器種にバリエーションが増え、その影響で調度具の比率も上昇する。

肥前磁器に続くのは肥前陶器である。器種は前代と変わりなく、食膳具の碗・皿を中心に貯蔵具の甕も出土し、同時期とするSK55では鉢や擂鉢などもみられる。中国在地陶器は、本遺構では器種は不明であるが、同時期のSK55では貯蔵具が主に出土する。

焼締陶器で高い比率を示すのは備前焼である。擂鉢・甕が出土し、同時期のSK54から灯火具が出現する。擂鉢は調理具組成をみると備前焼１%、堺・明石焼１%と、これらが拮抗する（第118図）。また同時期のSK54・55では備前焼の比率が高いことから、本時期の擂鉢の主体は備前焼であると思われる。甕は貯蔵具で備前焼60%、肥前陶器40%が出土し（第119図）、前代に引き続き備前焼が主体である。この他に、京焼系陶器は本時期から出現する。主な器種は丸碗で、色絵を施すものが多い。瀬戸美濃陶器は天目碗が僅かに出土する。

17世紀後期～18世紀前期の広島城跡の産地別組成は土師質土器が減り、それに反比例して肥前磁器が増加する。用途別組成で食膳具が依然として高い比率を示し、調度具のバリエーションが増える。これら諸点は、Ⅱ城下町型遺跡と共通する。さらに、堺・明石焼、京焼系陶器などの出現時期、有田町で生産された高級品の割合など同じであるが、肥前磁器が17世紀後期～18世紀前期に増加し、時期差がある。したがって、Ⅱ－２城下町型遺跡に属すると考えられる。

その一方で、肥前陶器は本遺跡では食膳具・調理具・貯蔵具と豊富な器種が出土したが、近畿では城下町型遺跡に限らず他の類型でも、食膳具が主体であり流通品に違いがある。このうち擂鉢・甕は近畿では丹波焼や信楽焼などが、窯場の近郊でその市場を独占していた。本遺跡でも近在する備前焼が多く出土するが、市場を独占はしていない。よって、広島城跡の擂鉢・甕の様相は近畿とは異なり、また、肥前陶器は多器種の製品が流通することが明らかとなった。

③　18世紀後期～19世紀前期

本時期の資料であるSK16は廃棄土坑である。産地別組成は肥前磁器37.3%、土師質土器20.5%、肥前陶器15%、堺・明石焼８%、備前焼５%、京焼系陶器５%、中国在地陶

器４％、信楽焼２％、瀬戸美濃陶器２％、上野・高取焼 0.6%、中国製磁器 0.6%と続く（第 115 図）。用途別組成は食膳具 60%、調理具 26%、貯蔵具７％、調度具７％にわかれる（第 116 図）。

肥前磁器が前代よりさらに比率を上げる（第 115 図）。主な器種は食膳具が多く、その組成を見てみると肥前磁器 62%、肥前陶器 17%、瀬戸美濃陶器７％、京焼系陶器２％と前代より上昇する（第 117 図）。また、碗・皿ともに器種は豊富で、特に碗は広東碗・望料碗・筒型碗・小丸碗などがみられる。品質は有田町で生産された高級品２に対して、「くらわんか手」とよばれる量産品３と、前代と変わりない。

土師質土器は前代より比率は下降するが、依然として高い比率である。器種は引き続き皿を主とし、焙烙が出土する。調理具組成では土師質土器焙烙 16%を示し、18 世紀中期では 80%であったため、本器種の減少により全体量が減ったと思われる。

肥前陶器は前代より比率が下降する。器種は碗・皿・鉢などの食膳具、調理具の片口がある。17 世紀後期～18 世紀前期では擂鉢・甕が一定量出土したが、本遺構ではなく、同時期とする SK18 から 1.5%と僅かに出土する程度で、この減少により比率を下げたことがわかる。

焼締陶器で高い比率を示すのは堺・明石焼である。器種は擂鉢で、調理具組成を見てみると堺・明石焼 41%、備前焼 25%、上野・高取焼４％と堺・明石焼が主体となる（第 119 図）。この様相は 18 世紀中期からみられ SK39 では堺・明石焼２％、備前焼１％と堺・明石焼が高く、本時期にはその比率値に差異がある。

堺・明石焼に続くのは備前焼である。主な器種は擂鉢・甕で、擂鉢は先の通りに堺・明石焼に主体が移行するが、甕は貯蔵具組成で備前焼 65%と依然として高い比率で（第 119 図）、これにより一定量出土したと思われる。

京焼系陶器は前代よりやや比率を上げる。主な器種は引き続き碗であるが、本時期から土瓶が出現する。調理具組成では 16%と出現と同時に一定量出土し（第 118 図）、この影響により用途別組成において調理具の比率が上昇すると思われる。中国在地陶器も増加する。主な器種は貯蔵具の甕で、その組成で 35%と高い比率を示す（第 119 図）。

中国地方において本遺跡と同じ様相を示す遺跡は、山口県の長門国府遺跡がある。

18 世紀後期～19 世紀前期の広島城跡の産地別組成は肥前磁器が高い比率を示し、土師質土器や焼締陶器が前代より比率を下げる。品質について量産品が多いが高級品は一定量受容される。このような諸点は、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡と共通する。また、擂

鉢は堺・明石焼が中心であることや、甕の受容についてもこれら２類型遺跡と同様であった。

しかし、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷型遺跡では京焼系陶器の煮沸具の増加により、産地別組成で肥前磁器と拮抗し、さらに用途別組成でも食膳具が前代より減少し、調理具と近い比率を示す組成に変化した。しかし、広島城跡では京焼系陶器土瓶、中国在地陶器土瓶がやや上昇するが比率は低く、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷型遺跡のような変化はみられず、その様相はむしろ近畿の集落型遺跡と類似する。

したがって、18 世紀後期～19 世紀前期の広島城跡は、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷型遺跡と概ね共通するが、Ⅳ集落型遺跡の様相も含むことから、Ⅱ－２城下町型遺跡と類型する。

２　米子城跡（第 115 図 - 10）

①　16 世紀末～17 世紀前期

広島城跡と同じ城郭遺跡である米子城跡も計測分析できたので、それを取り上げる。

本遺跡は、江戸時代は因幡、現在は鳥取県米子市に所在する。中世は尼子氏支配下の城館として、江戸時代には中村一忠が入城するが、慶長 14 年（1609）に中村一忠が急死し、翌慶長 15 年（1610）に美濃国黒野城主加藤貞泰が伯耆の国である会見・汗入郡６万石の領主として転封される。元和３年（1617）に加藤貞泰は伊予国大洲へ転封となり、因伯の領主池田光政の一族が米子城を預かり、以後、親族が継続する。

発掘調査は、主に武家屋敷が点在した城下町で主に行われており、現在までに 30 数次に及ぶ。21 次調査では、江戸時代の遺物が比較的まとまって出土していることから、数量カウントし、米子城跡の土器・陶磁器の組成として報告されている。今回は、この資料を再分析し、また、近年の調査成果も踏まえて、その分析結果を述べる。

本時期は全体的に出土量が少なく、遺構によってその内容が大きく異なる。ＳＥ02 の産地別組成を比率の高い順に配列すると、肥前陶器 86%、備前焼７%、中国製磁器７%と続く（第 127 図）。用途別組成は食膳具 95%、調理具 2.5%、貯蔵具 2.5%にわかれる（第 128 図）。

産地別組成で高い比率を示すのは肥前陶器である。本地点の独自の特徴とも考えられるが、胎土目積みが多い。主な器種は碗・皿・鉢と擂鉢である。食膳具組成を見てみると肥前陶器 92%と多い（第 129 図）。品質は目痕を残す量産品３に対して、絵唐津などの高級品１で、量産品が多い。同時期と考えられる６次調査では土師質土器皿が出土し、その量

は肥前陶器と近接する。擂鉢は調理具組成では本産地のみだが、６次調査からは備前焼も僅かに出土する。

焼締陶器は備前焼が出土する。本遺構では甕のみだが、先に述べたが擂鉢も僅かに出土する。中国製磁器は食膳具で、その組成では８％と僅かである（第 129 図)。景徳鎮窯や漳州窯系の皿が出土する。

また、肥前陶器などの施釉陶器・磁器の主な器種は食膳具である。本遺構では食膳具組成で施釉陶器・磁器が大半を占める。ただ、先にも述べたが同時期とする６次の調査では土師質土器が高い比率を示すが、施釉陶器・磁器がやや上回ることから、本時期の食膳具は施釉陶器・磁器が多いと考えられる。

さらに本遺構では出土しないが、４・６次調査では、土師質土器、瀬戸美濃陶器が出土する。本時期では土師質土器の出土量が多く、先の調査では産地別組成で 50%近い比率を示す。よって、本時期の産地別組成では土師質土器が主体と思われる。瀬戸美濃陶器はごく僅かで、粗雑な作りの量産品は少なく、「桃山陶器」に分類される志野焼、織部焼などの懐石・茶器が出土する。

本時期の米子城跡の産地別組成は、肥前陶器・土師質土器を主体とし、備前焼が続く。用途別組成は食膳具が多く、その中心は肥前陶器を主とする施釉陶器・磁器で、これらを日用器として受容する。これら諸点は、概ねⅠ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡と共通する。しかし、米子城跡では貿易陶磁器が８％であるが、Ⅰ都市型遺跡では 20～30%を示しており、さらに、Ⅰ都市型遺跡は高級陶磁器が突出して高い比率を示す例があるが、本遺跡ではみられない。この貿易陶磁器の比率はⅡ城下町型遺跡とも差異がみられ、本遺跡と類似するのはⅢ在郷町型遺跡である。しかし、施釉陶器・磁器の食膳具が 50%以上出土すること、「桃山陶器」の懐石具や茶器が一定量出土みられる点はⅡ城下町型遺跡の特徴を多く示す。したがって、Ⅱ－２城下町型遺跡とした広島城跡と類似することから、両遺跡を同一類型とみることができる。

但し、相違点もある。擂鉢・甕などの主産地は近畿の城下町型遺跡では広域流通品の備前焼もしくは遺跡近郊の産地を受容した。米子城跡遺跡では九州の肥前陶器が高い比率を示しており、近畿の城下町型遺跡とは様相が異なる。ただ先に述べた広島城跡でも本時期に肥前陶器の擂鉢・甕が増加していたが、本遺跡ほど高い比率を示していない。したがって、肥前陶器の擂鉢・甕は、本時期には中国地方で受容し始めるが日本海側を中心に展開したと思われる。

② 17 世紀後期～18 世紀代

17 世紀後期～18 世紀前期の良好な資料はなかったが、SK49 は 18 世紀代の特徴を示すと思われたため取り上げた。産地別組成を見てみると土師質土器 48%、肥前磁器 24%、肥前陶器 17%、中国在地陶器 10%、備前焼 0.6%、瓦質土器 0.4%と続く（第 127 図）。用途別組成は調度具 53%、食膳具 36%、調理具 10%、貯蔵具１%にわかれる（第 128 図）。

産地別組成で高い比率を示すのは土師質土器である。器種は皿・焙烙・火消し壺が出土し、本遺構ではこれらの破損が激しかったため高い比率を示したが、個体数では次の肥前磁器をやや下回る。皿は本遺構では灯火芯を残すものが大半で、主に灯火具として使用したと思われる。これは調度具組成では土師質土器灯火具 90%、備前焼灯火具 0.4%とあり、土師質土器が主である（第 132 図）。

肥前磁器は食膳具の碗・皿・小坏、調度具の神仏具・文具など豊富な器種組成である。本遺跡の肥前磁器の出現期を示す資料はない。17 世紀中期とする SK44 の産地別組成をみると、肥前陶器 42%、土師質土器 40%、肥前磁器９%、中国製磁器 4.4%、瀬戸美濃陶器 2.3%、瓦質土器 0.4%と、肥前磁器の比率は低い。よって、本時期に増加することがわかる。本遺構で多く出土するのは食膳具で、その組成では肥前磁器 58%、中国在地陶器 21.6%、肥前陶器 20.6%（第 129 図）と高い比率を示し、この増加により前代の主であった肥前陶器から肥前磁器へ移行する。品質は有田町で生産された色絵や染付の高級食膳具２に対して、長崎県波佐見周辺の諸窯で生産された「くらわんか手」などの量産品３で、後者が多い。

次に続くのは肥前陶器である。器種は食膳具の碗・皿・鉢、調理具の擂鉢、貯蔵具の甕と豊富な組成である。このうち調理具組成をみると、肥前陶器擂鉢 71%、中国在地陶器擂鉢 18%と前代と変わらず高い比率を示す（第 130 図）。また、甕は貯蔵具組成では新たに中国在地陶器 19%が加わるが、肥前陶器 81%が主体で（第 131 図）、これら調理具・貯蔵具は本産地が中心であることがわかる。

中国在地陶器は本時期から出現する。この分類に含まれるのは石見焼・布志名焼・須佐唐津焼などの中国地方の日本海沿いの製品である。器種は食膳具の碗・皿・鉢、調理具の擂鉢・鍋類、貯蔵具の甕、調度具など豊富な組成である。しかし、肥前磁器・肥前陶器と重なる器種が多く、それらを上回る比率を示す製品はない。

本時期の米子城跡の産地別組成は、土師質土器が減り、肥前磁器が急増し、これを主体とする組成に変わる。肥前磁器の主器種は食膳具で、本時期に急増することにより用途別

組成において前代よりさらに高い比率を示す。これら諸点はⅡ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡と共通する。しかし、有田町で生産された高級食膳具の割合は、Ⅱ城下町型遺跡と共通するが、増加時期が異なる。したがって、本時期の米子城跡の土器・陶磁器の様相はⅡ－２城下町型遺跡と同一類型に属するとみることができる。

３　津和野城下町祇園町遺跡（第 114 図－７）

本遺跡は、江戸時代は石見と呼称され、現在は島根県鹿足郡津和野町に属する。祇園町遺跡は近世津和野城下町の北端に位置し、元禄年間の絵図によると町屋が建ち並ぶ地域である。平成 10 年（1998）におこなった発掘調査では６時期の火災層を検出した。その中で、遺物が比較的まとまって出土したのが安永２年（1773）、享和元年（1801）に相当する火災層に伴う面で良好な一括廃棄土坑を検出した。

４－S2 は、安永２年（1773）の火災に伴う面より検出した一括廃棄土坑である。産地別組成を比率の高い順に配列すると肥前磁器69%、中国在地陶器23%、土師質土器3.5%、肥前陶器 2.5%、萩焼 1.6%、瀬戸美濃陶器 0.4%と続く（第 147 図）。用途別組成は食膳具 46%、調度具 36%、調理具 10%、貯蔵具８%にわかれる（第 148 図）。

肥前磁器は産地別組成で一番高い比率を示す。食膳具の碗・皿・鉢・小坏、調度具の神仏具・化粧具・瓶類と豊富な器種組成である。食膳具組成を見てみると肥前磁器 78%、中国在地陶器 17%、萩焼 3.5%、肥前陶器 1.5%と高い比率を示し（第 149 図）、そのうち肥前磁器碗 34%が多く出土する。調度具もその組成で 58%と高い比率を示す（第 152 図）。品質は有田町で生産された染付の高級食膳具１に対して、長崎県波佐見町周辺の窯で生産された量産品３で、後者が主体である。

これに続くのは中国在地陶器で、器種は食膳具の碗・鉢、調理具の擂鉢・片口、貯蔵具の壺・瓶類、調度具の灯火具・神仏具など豊富な組成である。食膳具は先の通りだが、擂鉢は調理具組成で擂鉢 43%、片口 57%と本産地のみである。また、貯蔵具も肥前陶器甕 37%、中国在地陶器甕 37%、中国在地陶器瓶 26%と中国在地陶器が中心である。甕は本遺構では肥前陶器と中国在地陶器と拮抗するが、同時期の遺構では中国在地陶器が高い比率を示す。

土師質土器は皿が出土する。皿はロクロ成形で灯火芯を残すものがある。灯明皿は調度具組成をみると土師質土器４%、中国在地産陶器５%で、中国在地陶器が土師質土器よりやや高い比率を示す（第 152 図）。同時期とする４－S3 からは甕が出土し、これは佐野焼

甕である。この他、萩焼は食膳具が僅かに出土する。

18 世紀後期～19 世紀前期の本遺跡の産地別組成は肥前磁器が高い比率で、施釉陶器が土師質土器より多く出土する。用途別組成は食膳具がもっとも高い比率を示し、この主となるのが肥前磁器でこれを日用器として受容される。これら諸点はⅣ集落型遺跡と共通する。また高級品の割合も、量産品４に対して高級品１であることも類似する。したがって、本遺跡はⅣ集落型遺跡と同一類型に属すると認められる。

４　四日市遺跡（第 114 図 - ２）

①　17 世紀後期～18 世紀前期

城郭資料が続いたが町屋資料も一部計測分析できた。その中で四日市遺跡を取り上げる。本遺跡は、江戸時代は安芸、現在は広島県東広島市に属し、近世は西国街道（山陽道）沿いの「宿場町」であった。本街道は大坂から九州を結ぶ脇往還で、四日市はその街道に沿って町屋が形成され、規模は延長 900mにも及ぶと考えられている。

発掘調査は、JR西条駅南側の西条本町、栄町地区が中心で、旧四日市の中心部を主に行われている。調査の結果、18 世紀以降の遺構・遺物を中心とし、特に幕末に描かれた絵図のとおりの屋敷割や井戸、便所などが検出された。また、その建物が 19 世紀前期に建てられ、既存時まで継続することがわかった。遺物は、16 世紀末～17 世紀初頭の肥前陶器碗・皿や漳州窯の青花皿なども出土するが、18 世紀以降の遺物と共伴するため、17 世紀代の土器・陶磁器組成は不明である。中心は先に述べたとおり 18 世紀代以降である。第１～４次調査の出土遺物については、堀内秀樹氏が計測分析され本遺跡の土器・陶磁器の様相を述べている。この堀内氏の分析方法は、筆者の分析とほぼ同じであり、同氏の分析結果を採用した[5]。ただ、土師質土器、瓦質土器については分析していないため数値には示せなかった。

17 世紀後期～18 世紀前期の良好な資料として第 10 次調査第 5827 号遺構がある。産地別組成を比率の高い順に配列すると肥前陶器 34%、備前焼 25%、肥前磁器 25%、瀬戸美濃陶器 16%と続く（第 121 図）。用途別組成は食膳具 71%、調理具 19%、調度具７%、貯蔵具３%にわかれる（第 122 図）。

肥前陶器は食膳具の碗・鉢が出土する。その組成をみると肥前陶器 66%、肥前磁器 35%

[5]堀内秀樹他『西条栄町・西条本町　四日市遺跡発掘調査報告書Ⅰ - 第１～４次調査 - 』財団法人　東広島市教育文化振興事業団 2004 年

と（第 123 図）、肥前陶器が高い比率を示し、このうち鉢が 35%と多く出土する。

肥前陶器に続くのは備前焼で、擂鉢・瓶類が出土する。これらの器種は、本遺構では各用途別において他産地は出土しておらず、第 1465 遺構では肥前陶器擂鉢が出土するが、備前焼を上回る比率は示さない。また、同時期と考えられる第 1465 遺構では備前焼甕も出土しており、本遺跡の擂鉢・甕は近在する備前焼が主産地であったことがわかる。

備前焼と同率なのが肥前磁器で食膳具の碗・皿が出土する。その組成は肥前陶器鉢より少ないが、碗は肥前陶器碗８%に対して肥前磁器碗 21%と大差があり、碗については本産地が主体である。品質は量産品の「くらわんか手」のみで、有田町で生産された高級品はみられない。皿は肥前磁器のみであったが、第 1465 遺構では肥前陶器皿が出土する。どちらも見込みに蛇ノ目釉ハギを施す量産品のみである。

土師質土器は皿・火鉢が出土する。数値化した場合は肥前陶器より比率は高いが、その比率値には大差はないと思われる。したがって、材質でわけた場合は肥前陶器・肥前磁器などの施釉陶器・磁器が半数近い比率を示す。また、17 世紀代の本遺跡では陶磁器２に対して土師質土器８であったため、本時期に施釉陶器・磁器が増加したことがわかる。

17 世紀後期～18 世紀前期の四日市遺跡は、産地別組成では土師質土器が高い比率だが、肥前陶器・肥前磁器が多く出土し始める。そのため焼締陶器の備前焼は前代より比率を下げる。用途別組成は食膳具が高い比率で、これに調理具がみられ、調度具・貯蔵具が僅かに出土する。これら諸点は、Ⅳ集落型遺跡と類似する。加えて有田町で生産された高級食膳具の割合や、擂鉢・甕の主産地も近在の産地がその市場を独占にするのも同様である。しかし、Ⅳ集落型遺跡では、産地別組成では肥前磁器が高く、肥前陶器を主とする本遺跡とは異なり、さらに、日用器である食膳具の材質に差異がみられる。

したがって、Ⅳ集落型遺跡と共通点が多いものの様相差もみられることから、本時期の四日市遺跡はⅣ－２集落型遺跡と同一類型とみなすことができる。

② 18 世紀後期～19 世紀前期

本時期の良好な資料として第 10 次調査第 6047 号遺構がある。産地別組成は肥前磁器 60%、中国在地陶器 12%、京焼系陶器 11%、備前焼７%、肥前陶器４%、堺・明石焼 2.5%、丹波焼 1.5%、瀬戸美濃陶器 1.5%、萩焼 0.5%と続く（第 121 図）。用途別組成をみると食膳具が 57%と高く、これに調理具 17%、調度具 16%、貯蔵具 10%とわかれる（第 122 図）。

産地別組成で高い比率を示すのは肥前磁器で、その比率は半数以上を占める。本産地の増加は 18 世紀中期からみられ、第 1459 号遺構の産地別組成では肥前磁器 83%、中国在地陶器６％、備前焼５％、肥前陶器４％、瀬戸美濃陶器２％となり（第 121 図)、肥前陶器と逆転する。主体である食膳具組成を見てみると肥前磁器が 82.6%と高い比率を示す（第 123 図)。器形は広東碗･高台 U 字高台広碗など法量的に中碗に属するものが多いが、小碗の筒型碗もあり器形にバリエーションがみられる。調度具は神仏具・化粧具・瓶類などが出土し、器種が増える。また、有田町で生産された高級食膳具は少なく、「くらわんか」手などの量産品が多い。その割合は高級品１に対して量産品３を示す。

次に続くのは中国在地陶器で、本産地も前代より比率が上がり、この傾向は肥前磁器と同様に 18 世紀中期からである。主な器種は、調理具の徳利・土瓶、貯蔵具の甕で、特に、徳利は多く１・２合程度の小型の製品である。本器種は備前焼が調理具組成で 23%と高い比率だが（第 124 図)、大型瓶であり大きさによって産地を使いわけされと思われる。土瓶は本時期から出現するが京焼系陶器土瓶より出土量は少ない。甕は貯蔵具組成では備前焼 33%、丹波焼 33%、中国在地陶器 25%、肥前陶器９％と（第 125 図)、各産地が拮抗する。

京焼系陶器は本時期から出現する。器種は食膳具の碗、調理具の土瓶である。碗は丸碗のみで、陶器碗の組成比をみると京焼系陶器４％、肥前陶器３％、瀬戸美濃陶器２％、萩焼 0.5%と京焼系陶器碗が一番高い比率を示す（第 123 図)。調理具の土瓶は本時期から出現し、同時期の遺構からも多く出土する。

焼締陶器で高い比率を示すのは備前焼である。しかし、前代より比率が下降する。これは前代まで主体であった擂鉢が他産地に移行するためであるが、徳利・甕などによって一定量を保持したと思われる。

肥前陶器は食膳具の碗・鉢、調理具の片口、貯蔵具の甕、調度具の神仏具と前代と同様に豊富な器種組成である。しかし、前代より比率が大幅に下降する。これは先にも述べたが食膳具の減少も大きいが、中国在地陶器擂鉢・甕などの増加により出土量が減ったことにも要因がある。

堺・明石焼では擂鉢が出土し、本遺構ではこれのみである。本産地は 18 世紀後期から出土し、出現と同時にその市場を独占する。土師質土器は前代より比率を下げるが、20～10%台はキープしたと思われ、中国在地陶器と近接する値を示す。主な器種は皿・焙烙・火鉢である。

18 世紀後期～19 世紀前期の四日市遺跡は、産地別組成において肥前磁器が高い比率を示し、施釉陶器・磁器が土師質土器より多く出土する。用途別組成では食膳具が主体であるが、調度具が前代より僅かに比率を上げる。品質は有田町で生産された高級品は少なく、量産品が中心であった。このような諸点は、Ⅳ集落型遺跡と共通する。したがって、18 世紀後期～19 世紀前期の四日市遺跡は、Ⅳ集落型遺跡と同一類型に属すると認められる。

第３節　北九州における土器・陶磁器の様相

北九州地方の近世遺跡は、肥前陶器や肥前磁器などの窯跡が有名であるが、消費地遺跡も多く点在する。その中で、いくつかの遺跡・遺構を計測分析した。ここではその分析結果と近畿の４類型遺跡と比較検討し、各遺跡を分類しその特徴を述べる。

１　小倉城・小倉城下町跡（第 160 図－1）

小倉城・小倉城下町跡（以後、小倉城と略す）は、江戸時代の国名は豊前、現在は福岡県北九州市に属する。関ヶ原の戦いで功績を得た細川忠興が慶長７年（1602）から７年の歳月をかけて毛利氏の小倉城を改築し、そこを居城とする。その後、寛永９年（1632）から譜代大名小笠原忠真の居城となり、以後、幕末まで継承する。

小倉城の発掘調査は、本丸及び城下町関連で進められ、現在のところ約 60 数次に及ぶ調査がおこなわれている。当然、多くの遺構・遺物を検出し、その中で良好な一括廃棄遺構も含む。但し、一ヶ所の調査区で重層的に遺物の変遷がわかるところはなく、よって、城下町全体でその組成を示す遺構を選別し、それを中心に検討する。また、今回は、資料的な制限があり出土遺物のすべてを計測分析できなかった。計測できない資料は実見し、その特徴が計測したデータ結果と大差ないと考えた資料を採用した。

①　16 世紀末～17 世前期

本時期の良好な資料として室町遺跡第５地点 287 号土坑がある。産地別組成を比率の高い順に配列すると、上野・高取焼 25%、瓦質土器 23%、肥前陶器 20%、土師質土器 12%、中国製磁器７%、瀬戸美濃陶器 1.4%、備前焼 0.8%と続く（第 160 図）。用途別組成は食膳具 56%、調度具 18%、調理具 15%、貯蔵具１%である（第 161 図）。

産地別組成で高い比率を示すのは上野・高取焼である。器種は食膳具の碗・皿・鉢、調理具の擂鉢・片口、貯蔵具の甕と豊富な組成である。本産地は 16 世紀末～17 世紀初頭と

する小倉城新馬場跡１号井戸の産地別組成によると、土師質土器 76.8%、上野・高取焼 19%、肥前陶器 1.3%、瓦質土器 1.2%、備前焼 0.75%、瀬戸美濃陶器 0.7%、中国製磁器 0.2%、丹波焼 0.05%と施釉陶器・磁器で高い比率を示し、地元産が多く流通することがわかる。器種で多いのは擂鉢で、調理具組成をみると上野・高取焼 43%、瓦質土器 30%、備前焼４%と上野・高取焼が高い比率を示す（第 163 図）。

上野・高取焼に続くのは瓦質土器である。主な器種は擂鉢・火鉢で、擂鉢は先の通り、上野・高取焼に次いで高い比率を示す。火鉢は調度具組成で 65%と多く、前代の１号井戸では１%を示したことから、本時期に増加する。

次は肥前陶器である。食膳具の碗・皿を主体とし、その組成をみると肥前陶器 44%、上野・高取焼 31%と高い比率である（第 162 図）。室町遺跡第５地点では本遺構以外に擂鉢・甕が出土している。傾向として肥前陶器擂鉢は少ないが肥前陶器甕は上野・高取焼より多く出土する。したがって、本時期の擂鉢・甕は近郊の産地を主に受容することがわかった。

土師質土器は皿・焼塩壺で、本遺構では施釉陶器・磁器より低い値であるが、小倉城新馬場跡１号井戸では産地別組成でもっとも高い比率を示し、これに類似する遺構が多い。したがって、本時期では土師質土器が産地別組成において主体であったと考えられる。皿はロクロ成形のみで灯火芯を残すものが多い。

他に中国製磁器がある。器種は皿・鉢があり、食膳具組成では 15%と他の産地と比べると少ないが、磁器は本産地のみである（第 162 図）。景徳鎮窯の碗・皿が多いが、漳州窯系の鉢も出土する。瀬戸美濃陶器は 1.4%と少ない（第 160 図）。量産品はほとんどなく「桃山陶器」に分類される志野焼の懐石具が多く、本遺構では織部焼灯火具が出土する。

また、これら施釉陶器・磁器は先に述べた上野・高取焼、肥前陶器なども食膳具が多く出土する。その組成をみると土師質土器 16%を省くと、施釉陶器・磁器で構成されているため、これらを主に受容していたことがわかる。

焼締陶器では備前焼、丹波焼が出土する。これらの主な器種は擂鉢である。備前焼は 16 世紀末～17 世紀初頭では擂鉢以外に甕・壺などが出土したが、本遺構以外に室町遺跡第５地点では僅かだが出土する。丹波焼の主な器種は鉢で、大平鉢が出土する。

北九州において、同じ様相を示す遺跡として福岡県福岡市の博多遺跡が挙げられる。

16 世紀末～17 世紀前期の小倉城跡の産地別組成で最も高い比率を示すのは土師質土器で、これに上野・高取焼・肥前陶器などの施釉陶器・磁器が続き、焼締陶器の比率が低い。用途別組成は食膳具が高い比率を示し、これを日用器として受容される。これら諸点は、

近畿のⅠ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡と共通する。加えて擂鉢・甕について近郊の製品を主体とすることも同じであった。しかし、小倉城跡では貿易陶磁器が５％であるが、Ⅰ都市型遺跡では20～30％を示しており、さらに、Ⅰ都市型遺跡は高級陶磁器が突出して高い比率を示す例があるが、本遺跡ではみられない。この貿易陶磁器の比率値はⅡ城下町型遺跡でも10％を示し、この類型とも異なる。その特徴を示すのは在郷町型遺跡と共通する。但し、施釉陶器・磁器の食膳具が50％以上出土すること、「桃山陶器」に分類される懐石具が一定量出土するなど、Ⅱ城下町型遺跡の特徴も多く示す。これらの特徴は四国の高松城跡や中国の広島城跡と類似することから、本遺跡はⅡ－２城下町型遺跡と同一類型に属すると考えられる。

②　17世紀後期～18世紀前期

本時期の良好な資料として京町遺跡Ⅰ区２号瓦溜があり、享保10年（1725）の火災に伴う廃棄土坑である。産地別組成を見てみると肥前磁器56.2％、上野・高取焼17％、土師質土器11％、備前焼５％、京焼系陶器５％、中国製磁器2.9％、肥前陶器1.9％、瓦質土器１％と続く（第160図）。用途別組成は依然として食膳具が48％と高く、これに調度具25％、貯蔵具19％、調理具８％にわかれる（第161図）。

本時期では肥前磁器が高い比率を示す。本遺跡における肥前磁器の出現時期は17世紀前期～17世紀中期と考えられている[6]。小倉城御蔵跡10号は17世紀後期の年代観が与えられ、その産地別組成では肥前磁器55％、土師質土器21％、肥前陶器17％、中国製磁器６％、上野・高取焼１％で肥前陶器が高い比率を示し（第160図）、この時期には主体になることがわかる。本遺構では碗・皿などの食膳具が多く出土し、その組成をみると肥前磁器76％と大半を示す（第162図）。碗のタイプは「くらわんか手」と呼ばれる量産品が３に対して、有田町で生産された高級品１で圧倒的に量産品が多い。その一方、皿は有田町で生産された高級品３に対して、「くらわんか手」などの量産品４で、碗と皿では様相が異なる。食膳具以外には、油壺・香炉・瓶類(花瓶)などの調度具が僅かであるが出土する。

肥前磁器に続くのは上野・高取焼で、食膳具の皿・鉢、調理具の擂鉢・徳利、貯蔵具の甕、調度具の仏花瓶、香炉など豊富な器種組成である。前期で高い比率を示した擂鉢は、調理具組成で上野・高取焼20％、備前焼８％と（第163図）、依然として多い。貯蔵具の

[6]佐藤浩司「肥前陶磁の流通・福岡・大分・熊本」『国内出土の肥前陶磁器 西日本の流通をさぐる　第二分冊』　九州近世陶磁学会　2002年

甕は、上野・高取焼 36%、土師質土器 17%、瓦質土器４％で、これも大きな変化はない（第 164 図）。

土師質土器は前代より比率が下降する。主な器種は皿・焼塩壺で、食膳具組成では 14％と前代より比率が下がり（第 162 図）、この影響によって産地別組成での比率が低くなったと思われる。また、前代で高い比率を示した瓦質土器も比率が下がる。これは主製品である擂鉢の激減によるもので、本時期には擂鉢は完全に上野・高取焼が中心となる。その他、火鉢については一定量出土する

備前焼は擂鉢が出土する。前代と大きな変化はないが、調理具組成をみると上野・高取焼擂鉢が 20%と高い比率を示すが、備前焼８％と僅かではあるが出土する（第 163 図）。この他、堺・明石焼擂鉢も本時期から出現する。他産地と比べると少ないが、地元産を主体とするなかで近畿から持ち込まれた意味は大きいと考えられる。

京焼系陶器も本時期から出現する。器種は食膳具の碗、調度具の火入れがある。出土量はすべて合わせても５％と他産地より低く、装飾も色絵に偏っており、上野・高取焼で生産しないものが流通したと考えられる。

肥前陶器は激減した値であるが、土師質土器、肥前磁器の破片数の関係で比率が低いが、個体数で見た場合には 20%となり、前代と大きな変化はない。食膳具の碗・皿・鉢、調理具の擂鉢で、京町遺跡Ⅱ－３区４号土坑１では貯蔵具の甕、調度具の香炉や線香立と豊富な器種が出土する。ただ、甕以外の器種は上野・高取焼を上回る比率を示さない。また、寺院跡で内野山窯の皿が大量に出土する例もあり、受容によってその組成は大きく異なる。

本遺跡と同じ様相を示す遺跡として、福岡県福岡市の博多遺跡がある。

本時期の小倉城跡の産地別組成は、17 世紀後期から急増する肥前磁器が主体となり、それにより前代まで中心であった土師質土器が減少する。また、京焼系陶器、堺・明石焼などが新たに加わる。用途別組成は食膳具が依然として主器種で、他とは大差がある。擂鉢・甕の主産地については、近郊の製品を受容する。これらの諸点は、Ⅰ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡と共通する。しかし、Ⅰ都市型遺跡では地点の性格によって高級陶磁器が突出して高い比率を示す例があるが、小倉城跡ではみられない。また、Ⅲ在郷町型遺跡よりも高級品の割合が多く、小倉城跡の様相はⅡ城下町型遺跡と共通する。
したがって、本時期の小倉城跡の土器・陶磁器の様相はⅡ城下町型遺跡と同一類型とみることができる。

２　長崎（第 159 図 - ６）

長崎は元亀元年（1570）の開港以来、長崎港を中心として発展する。町は、国際貿易の唯一の窓口であった出島から、北へ延びる現在の国道 34 号線沿いに町屋が形成され、町の発展とともに、町場化が東西に広がっていった。長崎の近世遺跡としては、出島及びそれに近接する万才町、興善町などの近世町屋跡がある。これらの遺跡からは、貿易都市を象徴するように貿易商品や外国の生活用具など国際色豊かな遺物が出土し、それがこの遺跡の特徴ともいえる。

計測分析は、本来なら他遺跡と同様に、良好な一括資料を検討し、遺跡の変遷を踏まえ、遺物分類しなければならない。しかし、資料的な制限があり土師質土器をはじめ他の陶磁器も計測分析することはできなかった。そのなかで築町遺跡・万才町遺跡の一部の資料を分析した。ただ、このような状況でありながら取り上げたのは、計測できない資料を実見し、計測データ結果と大差ないと考えたためである。以下に述べる資料は、築町遺跡・万才町遺跡の分析結果で、古い時期順に変遷を述べる。

①　16 世紀末～17 世紀前期

本時期の資料として築町遺跡２区 12 号土坑がある。産地別組成を比率の高い順に配列すると、中国製磁器 76%、東南アジア陶器 14%、中国製陶器 4.5%、肥前陶器 3.5%、瀬戸美濃陶器１%、上野・高取焼１%と続く組成である（第 166 図）。用途別組成は食膳具 80%を主体とし、調理具 15%、調度具４%、貯蔵具１%にわかれる（第 167 図）。

中国製磁器は産地別組成でもっとも比率が高い（第 166 図）。景徳鎮窯の製品が多く、他に福建・広東周辺の製品もある。器種は食膳具の碗・皿が主体で、その組成において 76%を示す。この他に小坏や調度具の合子なども一定量出土する。

これに続くのは東南アジア陶器で、器種は貯蔵具の甕・壺が出土する。これらはベトナム産の長胴壺、タイ産の壺で、いくつかのタイプに分類でき、用途は薬種容器として流通したものと考えられる。

他に、肥前陶器の主な器種は碗・皿などの食膳具で、その組成で６%と中国製磁器とは大差がある。品質は粗雑な作りの量産品は少なく、「桃山陶器」に分類される絵唐津が多く、器形も豊富である。他に調理具の擂鉢、調度具の瓶類がある。このうち擂鉢は調理具組成では本産地のみで（第 169 図）、他産地はみられない。また、本地点からは大甕が出土しており、貯蔵具も肥前陶器が主体であると考えられる。瀬戸美濃陶器は「桃山陶器」に分

類される志野焼、織部焼の懐石具や茶器で、量産品はない。

本時期の長崎の産地別組成は、中国製磁器を主体とする貿易陶磁器が多く、国産陶磁器が少ない。用途別組成は食膳具が圧倒的に高い比率で、調理具・貯蔵具が低い。このような諸点は、近畿の４類型遺跡とは共通性は少ない。したがって、本時期の長崎の特徴は近畿に同類型はみられず、独自の土器・陶磁器組成を示すため、本遺跡をＶ貿易都市型遺跡と類型する。

② 17 世紀末～18 世紀前期

本時期の資料として出島和蘭商館跡２号土坑がある。計測分析資料ではないがその組成は、産地別組成は貿易陶磁器が減り、国産陶磁器が中心となる。このうち肥前磁器が多く出土し、これに肥前陶器、上野・高取焼、中国製磁器、ベトナム磁器、京焼系陶器と続く。用途別組成は食膳具が半数以上を示し、調度具、調理具、貯蔵具と続く。

産地別組成において高い比率を示すのは肥前磁器である。本遺跡における肥前磁器の出現を示す資料はないが、築町１・３区焼土１層は寛文３年（1663）に長崎全体を消失した火災資料であり、その産地別組成をみると、中国製磁器 51.2%、肥前磁器 39%、肥前陶器 10%、中国製陶器 3.5%、土師質土器 0.5%と続き（第 166 図）、肥前磁器が出現と同時に高い比率を示し、17 世紀中期～17 世紀後期には上昇することがわかった。本遺構からは食膳具の碗・皿・鉢、調度具の化粧具・神仏具などが出土する。このうち食膳具が主体で、その組成でも半数近い比率を示すことから、本時期には中国製磁器に変わって肥前磁器が食膳具の主体となる。また、品質は有田町で生産された色絵や染付などの高級食膳具４に対して、長崎県波佐見周辺の諸窯で生産された「くらわんか手」などの量産品１と、本時期でも高級品が多い。

肥前陶器は肥前磁器に続く。器種は食膳具の碗・皿・鉢、調理具の擂鉢、貯蔵具の甕・瓶類、調度具の神仏具など豊富な組成である。食膳具は肥前磁器に次ぐ量比を示す。また、本時期から長崎県現川焼の食膳具が含まれる。この他、擂鉢と甕については、各用途別組成で前代と変わらず肥前陶器が独占する。

上野・高取焼は肥前陶器と器種組成（甕を省く）が共通する。各器種の組成をみると肥前陶器を上回るものはなく、あくまで肥前陶器を補う組成である。

中国製磁器は前代より激減する。この傾向は 17 世紀後期とする出島和蘭商館跡１号土坑から認められ、正保元年（1644）中国の明清の王朝交替に伴う内乱により中国磁器の輸

出が減少したためと考えられる。器種は皿・碗で、食膳具組成では肥前磁器、肥前陶器に続く比率を示し、前代より減少する。貿易陶磁器は他にベトナム磁器がある。鉢が主体で、スタンプ印で文様を施した製品が目立つ。

京焼系陶器は本時期から出現する。出土量は他の産地と比べるとごく僅かである。主な器種は丸碗・火入れなどで、色絵を施すものである。

本時期の長崎の産地別組成は肥前磁器が高い比率を示し、これに施釉陶器・磁器が続く。また、肥前磁器の増加が 17 世紀中期からみられた。用途別組成は食膳具が主体で、調理具、調度具などが続く。このような諸点は、Ｉ都市型遺跡と共通する。しかし、本遺跡のように有田町で生産された高級品の比率や中国製磁器・ベトナム磁器などの貿易陶磁器も多く出土する地点がＩ都市型遺跡でもあるが、その一方で、量産品を主体とする地点もあり、高級品や貿易陶磁器の受容が異なる。したがって、本時期の長崎の土器・陶磁器の様相は近畿には共通する遺跡はなく、Ｖ貿易都市型遺跡に分類する。

３　その他の遺跡

小倉城跡、長崎以外に 18 世紀後期～19 世紀中期にかけて、いくつかの遺跡・遺構で計測分析できた。ここでは遺構の古い順にその結果を述べる。

①　黒崎城跡（第 159 図－２）

本遺跡は福岡県北九州市に所在する。本城は関ヶ原の戦いの功により 52 万石の大名として筑前国に入部した黒田長政が福岡城築城に伴い築いた端城の一つである。しかし、元和元年（1615）の一国一城令により城は廃城となるが、江戸時代は筑前長崎街道の宿場町として整備される。

本遺跡では 18 世紀後期以降に黒崎宿に属する良好な資料が多く残る。黒崎城跡２区２号井戸は 18 世紀後期～19 世紀前期の一括廃棄土坑である。産地別組成を比率の高い順に配列すると、肥前磁器 46%、上野・高取焼 27%、肥前陶器 10%、京焼系陶器６％、土師質土器９％、瓦質土器１％、備前焼１％と続く（第 178 図）。用途別組成は食膳具 61%、調理具 17%、調度具 20%、貯蔵具２％にわかれる（第 179 図）。

産地別組成で高い比率を示すのは肥前磁器で、食膳具の碗・皿・鉢、調度具の紅皿・仏飯具・仏花瓶・段重などが出土する。このうち食膳具組成では 58%を示し、次に続く肥前陶器 18%と大差がある（第 180 図）。器種はくらわんか手碗が多く、広東碗・筒型碗・小

広東碗など豊富な組成である。皿は大皿がなく深皿が主体である。品質は有田町で生産された高級品１に対して、「くらわんか手」などの量産品３と、量産品が多い。

肥前磁器に続くのは上野・高取焼である。器種は食膳具の碗・鉢、調理具は擂鉢・土瓶、貯蔵具は甕、調度具は瓶類と豊富な組成である。その中で、擂鉢は肥前陶器７％に対して、上野・高取焼 55％と大半を占める（第 181 図）。また、甕も本産地のみで 65％と多く（第 182 図）、上野・高取焼擂鉢・甕が主体である。その他、土瓶については、釉調や焼成の特徴からおそらく福岡県小石原中野窯の製品の可能性が高いと考えられる。

肥前陶器は、食膳具の碗・鉢、調理具の擂鉢、調度具の瓶類など豊富な器種組成である。各用途別組成をみると上野・高取焼を補う程度の組成である。京焼系陶器は食膳具の碗が出土し、他の産地と比べるとその量は少ない。装飾・器形は色絵の丸碗である。

土師質土器は皿・焙烙・焜炉類が出土する。焙烙は調理具組成で 23％を示し、他に肥前陶器擂鉢７％、上野・高取焼擂鉢 55％、上野・高取焼土瓶８％に分れ（第 181 図）、鍋類は本器種のみである。この他に、同時期の遺構から備前焼徳利、堺・明石焼擂鉢、瀬戸美濃陶器鉢、中国在地陶器擂鉢・甕が出土するが少ない。

本時期の黒崎城跡の産地別組成は肥前磁器が高い比率を示し、これに施釉陶器・磁器が続く。用途別組成は食膳具が多く、調理具、貯蔵具は少なく、食膳具とは差異があった。また、擂鉢・甕などは近郊の上野・高取焼を受容していた。このような諸点は、Ⅳ集落型遺跡と共通する。したがって、本時期の黒崎城遺跡の土器・陶磁器様相は、Ⅳ集落型遺跡と同じ類型と認めることができる。

② 堅町遺跡（第 159 図－１）

本遺跡は、小倉城下町内に属し、絵図から町屋が建ち並んでいた地域にあたることがわかっている。第１地点 33 号土坑は、陶磁器の年代観から 19 世紀前期～幕末期の遺構と考えられている。

産地別組成を比率の高い順に配列すると、肥前磁器 35％、土師質土器 28％、上野・高取焼 19％、肥前陶器９％、京焼系陶器５％、瓦質土器２％、萩焼２％と続く（第 160 図）。用途別組成は、調度具 48％、食膳具 25％、調理具 18％、貯蔵具５％にわかれる（第 161 図）。

産地別組成で高い比率を示すのは肥前磁器である。器種は食膳具の碗・皿・鉢を主体とし、その組成では 57％と高い比率を示す（第 162 図）。また、調度具は化粧具の白磁紅皿、

水滴・水注などの文具も出土する。ただ、肥前磁器と分類した中には、この時期に小倉城近郊で開窯した磁器窯の製品も含むと考えられる。

土師質土器は皿・焙烙・甕が出土し、このうち甕は貯蔵具組成で 90%を示す（第 164 図)。器形・口縁部の形状から「佐野焼」と考えられる。小倉城跡でも 17 世紀後期～18 世紀前期は 18%出土しており、本時期にはさらに増加することがわかる。

上野・高取焼は、食膳具は碗・鉢、調理具は擂鉢、調度具の神仏具・瓶類など豊富な器種組成である。食膳具組成をみると肥前磁器 57%、土師質土器 15%、肥前陶器 10%、京焼系陶器９%、萩焼５%、上野・高取焼４%と（第 162 図)、上野・高取焼の出土量は少ない。主体となるのは擂鉢で、調理具組成をみると本産地のみである（第 163 図)。また、同時期の遺構からは堺・明石焼擂鉢が出土するが、ごく僅かである。この他に神仏具・瓶類がある。

肥前陶器は食膳具、貯蔵具があり、その出土量は少ない。京焼系陶器は食膳具の丸碗が出土する。同時期の 33 号土坑４では、調理具の土瓶・鍋類などがみられる。このうち土瓶・鍋類は京焼系陶器以外のものも出土する。煮沸具の鍋類は上野・高取焼で生産されておらず、福岡県小石原中野窯の製品の可能性が高いが断定はできない。瓦質土器は火鉢である。調度具組成をみると比率は低いが（第 165 図)、多器種みられるなかで一定量は出土する。

堅町遺跡の土器・陶磁器の様相は、先の述べた黒崎城跡２区２号井戸と共通する。したがって、小倉城の町屋の土器・陶磁器様相は、Ⅳ集落型遺跡と同一類型と認めることができる。

③　西中野遺跡（第 159 図 - ５）

佐賀県佐賀市に所在する。佐賀城の北東に位置する中世～近世の複合遺跡で、近世は農村集落跡と考えられている。19 世紀代に属するいくつかの遺構を計測分析することができた。ここではその中で、19 世紀前期～19 世紀中期の資料を検討する。

本時期の良好な資料として SK3002 があり、遺構の性格は廃棄土坑である。産地別組成は肥前磁器 37%、土師質土器 22%、瓦質土器 20%、肥前陶器 18%、京焼系陶器３%が続く（第 172 図)。用途別組成は調度具 44%、食膳具 38%、調理具 16%、貯蔵具２%にわかれる（第 173 図)。

産地別組成で高い比率を示すのは肥前磁器である。主な器種は食膳具で、その組成をみ

ると肥前磁器 78%、京焼系陶器 10%、土師質土器８％、肥前陶器８％と他の産地と大差がある（第 174 図）。碗の器形は端反碗、「くらわんか手」などで、蓋を伴うものは少ない。食膳具は他に皿・猪口・小坏がある。品質は波佐見周辺で生産された「くらわんか手」など量産品４に対して、有田町で生産された染付・赤絵の高級品１と、量産品が多い。食膳具以外に調度具の化粧具が少量出土する。

肥前磁器に続くのは土師質土器で、器種は皿・焙烙・焜炉類・ミニチュア土製品である。これらは胎土の色調、成形から在地産と考えられる。皿は灯火芯を残すものが多く、調度具組成では灯火具はこれのみである（第 177 図）。焙烙は調理具組成をみると、土師質土器焙烙 16%、肥前陶器擂鉢 28%、肥前陶器行平 27%、肥前陶器土瓶 24%とあり一定量出土する（第 175 図）。焙烙は 18 世紀代の出土量は少なく、この時期から増加する。

瓦質土器は火鉢・焜炉類が出土する。本遺構ではこれらの破損が著しいため産地・用途別組成で高い比率を示すが、個体数では次の肥前陶器を下回り、調度具の比率も食膳具よりも低い。但し、調度具組成においての比率は提示するように半数近い数値を示すと思われる。

肥前陶器は、食膳具の碗・皿・鉢、調理具の擂鉢・土瓶・土鍋・徳利、貯蔵具の甕、調度具など豊富な器種組成である。このうち調理具は、その組成で 51%を肥前陶器の煮沸具が占める（第 175 図）。徳利は１升瓶タイプが目立つ。

また、肥前陶器・肥前磁器については、製品の特徴から、陶器は武雄や嬉野、磁器は有田・波佐見の製品と共通するが、釉調や文様の特徴などから肥前以外の同じ技術的系譜を引く製品の可能性が高いと考えられる。特に、肥前陶器の土瓶や鍋類は福岡県小石原中野窯の製品と類似する。他に京焼系陶器は色絵の半球碗が僅かに出土する。

西中野遺跡の産地別組成は肥前磁器が高い比率を示し、これに肥前陶器が続く。用途別組成では食膳具が高い比率を示し、他の器種とは大差がみられた。加えて擂鉢・甕は遺跡近郊の肥前陶器を主に受容していた。このような諸点は、Ⅳ集落型遺跡と共通し、
西中野遺跡の土器・陶磁器の様相は、Ⅳ集落型遺跡と同一類型に属するとみることができる。

第４節　四国・中国・北九州における土器・陶磁器の様相

近畿以外の西日本のうち 20 遺跡を分析した結果、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅱ－２城下町型遺跡、Ⅳ集落型遺跡、Ⅳ－２集落型遺跡、Ⅴ貿易都市型遺跡の５類型に分類できた。本節で

は、これら遺跡の特徴を改めて比較検討し、西日本の土器・陶磁器の様相を明らかにしたい。

16世紀末～17世紀前期にかけて西日本に分布するのはⅡ－２城下町型遺跡(高松城跡、徳島城下町跡、広島城跡、米子城跡、小倉城跡など)、Ⅳ－２集落型遺跡（東山崎・水田遺跡、土井遺跡)、Ⅴ貿易都市型遺跡（長崎）の３類型である。産地別組成は３類型とも異なる。Ⅱ－２城下町型遺跡は土師質土器を主体とし、これに肥前陶器を中心とする施釉陶器・磁器が続き、焼締陶器の比率が低い。Ⅳ－２集落型遺跡では土師質土器を主体とすることはⅡ－２城下町型遺跡と共通するが、施釉陶器・磁器の比率が極端に低い。これら２類型は量比に大差はあるものの、国産陶磁器を中心とするのに対して、Ⅴ貿易都市型遺跡は中国製磁器や東南アジア陶器などの貿易陶磁器を主体する組成を示す。

３類型の用途別組成を見てみると、食膳具が高い比率を示すことは、Ⅱ－２城下町型遺跡、Ⅴ貿易都市型遺跡とは概ね共通する。食膳具の中心はⅡ－２城下町型遺跡では肥前陶器、Ⅴ貿易都市型遺跡では中国製磁器で、産地は異なるが両類型遺跡では施釉陶器・磁器を日用器として受容したと考えられる。その一方、Ⅳ－２集落型遺跡は食膳具が少なく、調理具・貯蔵具を中心とすることから、本類型遺跡では食膳具を日用器としての受容は少なかったと考えられる。

施釉陶器・磁器のうち中国製磁器や朝鮮王朝陶磁器、東南アジア陶器などの貿易陶磁器の全体量に対する比率は、Ⅴ貿易都市型遺跡では 94.5%を示すが、Ⅱ－２城下町型遺跡５％台、Ⅳ－２集落型遺跡１％未満であり、受容量が大きく異なる。但し、貿易陶磁器以外の国産の高級品である「桃山陶器」に分類される絵唐津や瀬戸美濃陶器などの懐石具や茶器は、Ⅳ－２集落型遺跡ではほとんど出土しないが、Ⅴ貿易都市型遺跡５％、Ⅱ－２城下町型遺跡３％を示し、国産の高級陶器についてはⅤ貿易都市型遺跡とⅡ－２城下町型遺跡では貿易陶磁器ほどの大差はみられないことがわかった。

焼締陶器は３類型とも、主製品は擂鉢・甕であった。産地は近郊に窯場がある場合はそれを主に受容し、なければ広域流通品である備前焼が流通しており、これについては類型に関係なく差異がなかった。

17 世紀後期～18 世紀前期に至ると、上記の３類型に新たにⅡ城下町型遺跡が加わる。その状況は、Ⅱ－２城下町型遺跡は広島城跡、米子城跡、小倉城跡などは引き続きこれに属するが、高松城跡、徳島城下町跡などが本時期からⅡ城下町型遺跡変わっている。Ⅳ－２集落型遺跡は田代遺跡、中間西坪遺跡、小籠遺跡、香川県高松市の空港跡地遺跡、四日

市遺跡、Ⅴ貿易都市型遺跡は本時期も長崎が属する。

産地別組成を見てみると、肥前磁器が高い比率を示し、これに施釉陶器・磁器、土師質土器が続き、焼締陶器の比率が低い点は、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅱ－２城下町型遺跡、Ⅴ貿易都市型遺跡とも同じで、本時期にはⅡ－２城下町型遺跡とⅤ貿易都市型遺跡が共通するようになる。

肥前磁器の増加するのはⅤ貿易都市型遺跡が 17 世紀中期～17 世紀後期、Ⅱ城下町型遺跡とⅡ－２城下町型遺跡では 17 世紀後期で、これについては若干の受容による時期差がみられた。一方、Ⅳ－２集落型遺跡の産地別組成は、土師質土器が高い比率だが、肥前陶器・肥前磁器が多く出土し始めるが、依然として焼締陶器も一定量出土し、先に述べた３類型遺跡とは施釉陶器・磁器の出土量が少ない。加えて肥前磁器の増加はみられず、その傾向がみられるのは 18 世紀中期を待たなければならない。

また、京焼系陶器や堺・明石焼、中国在地陶器などの新産地の出現期は、Ⅳ－２集落型遺跡以外の３類型では本時期には出現しており、よって、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅱ－２城下町型遺跡、Ⅴ貿易都市型遺跡の３類型遺跡とⅣ－２集落型遺跡では陶磁器受容が遅れる傾向が認められた。

用途別組成は食膳具が大半で、調理具、調度具が続き、貯蔵具が僅かに出土する。この諸点は、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅱ－２城下町型遺跡、Ⅳ－２集落型遺跡、Ⅴ貿易都市型遺跡とも類似する。主体となる食膳具組成は、Ⅳ－２集落型遺跡以外の３類型遺跡は肥前磁器が 50％以上を占める。一方、Ⅳ－２集落型遺跡は肥前陶器が主体であり、他の３類型遺跡とは日用器の主産地が異なっていた。

陶磁器の高級品であるが前代では中国製磁器や「桃山陶器」と呼ばれる懐石具や茶器であったが、17 世紀後期～18 世紀前期では有田町で生産された染付・色絵などの高級食膳具が各地で出土する。量産品との割合は、Ⅴ貿易都市型遺跡では高級品４に対して量産品１、Ⅱ城下町型遺跡では高級品２に対して量産品３、Ⅱ－２城下町型遺跡では高級品１に対して量産品３、Ⅳ－２集落型遺跡では量産品が中心と、各類型によって高級品の割合が異なる。擂鉢・甕の主産地については、４類型は共通して近在の産地がその市場を独占にする様相を示していた。

18 世紀後期～19 世紀前期の西日本では、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅱ－２城下町型遺跡に属する遺跡は前代と変化がない。また、Ⅳ－２集落型遺跡は本時期にはみられず、新たⅣ集落型遺跡が出現する。前代にⅣ－２集落型遺跡に分類した四日市遺跡、小籠遺跡、空港跡地

遺跡がⅣ集落型遺跡となり、新たな遺跡として津和野城下町祇園町遺跡、黒崎城跡、堅町遺跡などが加わる。

産地別組成を見てみると、肥前磁器が高い比率を示し、これに施釉陶器が続き、土師質土器は前代より減少する組成は３類型とも類似する。用途別組成で食膳具・調理具が高い比率であることも同じで、このうち食膳具組成で肥前磁器が 50%以上を示すことも共通する。

本時期でも有田町で生産された高級品や貿易陶磁器が各地で出土する。Ⅱ城下町型遺跡、Ⅱ－２城下町型遺跡では高級品２に対して量産品３で、前代ではⅡ城下町型遺跡の方が高級品の割合が多かったが、本時期には両類型に差異がなくなる。Ⅳ集落型遺跡では高級品１に対して量産品４を示し、他の類型と比べて高級品の受容が少ない。

また、京焼系陶器の受容様相が３類型で異なる。Ⅱ城下町型遺跡では京焼系陶器の煮沸具が増加し、用途別組成において調理具が食膳具と近接した比率を示す。しかし、Ⅱ－２城下町型遺跡、Ⅳ集落型遺跡では京焼系陶器の煮沸具は出土するが、後者ほどその比率は低く、さらに京焼系陶器の煮沸具の増加と連動すると考えられる土師質土器の焜炉・火鉢の出土量も僅かで、受容が少なかったと考えられる。

以上、四国・中国・北九州の土器・陶磁器の産地別組成、用途別組成を比較検討し、近畿以外の西日本では近畿にはみられないⅡ－２城下町型遺跡、Ⅳ－２集落型遺跡、Ⅴ貿易都市型遺跡が存在することが明らかとなった。また、近畿に多くみられたⅡ城下町型遺跡が 17 世紀後期～18 世紀前期に四国で現れ、18 世紀後期～19 世紀前期にはⅣ集落型遺跡が西日本の各地で出現していた。

第４章　西日本における土器・陶磁器流通

はじめに

西日本の近世遺跡から多量の土器・陶磁器が出土する。これらの出土状況は遺跡によって異なり、そのため土器・陶磁器流通も相違があることが想定できる。

そこで西日本の近世遺跡から出土した土器・陶磁器を計測分析し、その産地別組成・用途別組成と分布状況を比較検討した結果、土師質土器は陶磁器とは異なる流通であることがわかった。さらに陶磁器流通は５類型に分類できた。ここではその類型ごとに陶磁器流通を述べ、土師質土器の流通について別節で検討する。

第１節　西日本における陶磁器流通の特徴

西日本の近世遺跡から出土した陶磁器を計測分析し、その産地別組成、用途別組成、各生産地の分布状況を比較したところ、陶磁器流通は以下の

①　西日本を広域に流通するもの（広域流通）

②　複数の国を跨いで中規模に流通するもの（中規模流通）

③　生産地を中心に小規模に流通するもの（小規模流通）

④　受容の目的によって本来の流通圏を越えて特定の器種が流通するもの（嗜好品流通）

⑤　内容物の受容によって流通するもの（内容物による流通）

５つに分類できた（以下、各類型について流通①、流通②略す）。ここでは５類型の流通の特徴と生産地での状況も含めて検討する。

１　広域流通について

16 世紀末～17 世紀前期の西日本の遺跡を見てみると、産地別組成は備前焼、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、肥前磁器などが共通して多く出土することから、これらが流通①に属すると考えられる。これら産地は量比に差異があるものの器種組成は、備前焼は擂鉢・甕、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、肥前磁器などの施釉陶器・磁器は碗・皿などの食膳具が概ね共通して出土する。したがって、本時期の陶磁器流通は流通①が中心とみることができる。

さらに、各地の肥前陶器（第 190～192）・肥前磁器の出現状況みると（第 193～195 図）、初期とされる岸岳系肥前陶器や初期伊万里の分布は近畿に多く点在し、増加時期も大坂城跡、堺環濠都市遺跡、奈良町遺跡、京都などの近畿の大都市では他の遺跡より早い。した

がって、本時期の陶磁器流通は近畿の大都市を中心に展開していたと考えられる。

この状況は窯跡の調査でも確認でき、備前焼、瀬戸美濃陶器、肥前陶器などで、16 世紀末～17 世紀初頭に窯の規模が拡大し、これに伴って窯構造にも変化がみられる。備前焼は 16 世紀後期までは全長 40m以内であったものが、16 世紀末～17 世紀初頭に至ると 45m 以上に拡大する[1]。さらに、規模拡大に伴って天井を支える円柱の大きさも拡大し、製品によって匣鉢や焼台を使用するなどの改良が行われる。これは瀬戸美濃陶器や肥前陶器でも同様で、17 世紀初頭に肥前陶器は横狭間式の連房式登窯[2]、瀬戸美濃陶器でも連房式登窯が導入される[3]。これら産地の窯構造の変化は、陶磁器の受容増大に伴うことは一目瞭然である。

製品の組成は生産地によって時期差がある。備前焼や瀬戸美濃陶器は、16 世紀末にはこれまでの主製品に加えて、食膳具の器種増加や特別注文品と考えられる懐石具・茶器が生産される。肥前陶器は少し遅れ、食膳具を中心に器形及び生産量も増える。この時期は胎土目積み生産が盛んになる 1600 年以降である。肥前磁器は先の産地とは様相が異なる。開窯時は陶器と併用して焼成されたため規模の拡大や窯構造に大きな変化はない[4]。ただ、寛文 14 年（1637）の窯場整理・統合後は生産体制が整ったためか、それ以前と後では生産量が異なり、統合後には増加し、品質も改良される。このように生産地の状況からも消費地での受容増加に伴い、窯の改良・規模拡大が行われる。

17 世紀後期～18 世紀前期に至ると、備前焼、瀬戸美濃陶器は限られた地域で出土し、本類型には属さなくなる。その一方で肥前陶器、肥前磁器の食膳具は依然として西日本で広域に出土し、これらが前代に引き続き流通①に属する。

このうち肥前磁器は近畿の遺跡に多く出土するが、それ以外の地域は城下町跡に集中する（第 195 図）。増加過程も大坂城跡や京都などでは 17 世紀中期から産地別組成で増加し始め（第２・21 図）、大量に流通したことがわかる。これは明石城武家屋敷跡（第 81 図）や伏見城跡（第 21 図）などの城下町跡では 17 世紀後期、伊丹郷町遺跡（第 14 図）は 17 世紀後期～18 世紀前期、中百舌鳥遺跡（第 55 図）などの集落跡では 18 世紀前期に遅れ

---

1 石井　啓「生産⑦　備前」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』記念講演・シンポジウム資料集　財団法人瀬戸市文化振興団埋蔵文化財センター　2006 年

2 大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニュー・サイエンス社　1989 年

3 藤澤良祐「瀬戸・美濃登窯製品の生産と流通」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』記念講演・シンポジウム資料集　財団法人瀬戸市文化振興団埋蔵文化財センター　2006 年

4 村上伸之「生産②　肥前　肥前－生産に関わる技術の成立と展開を中心に－」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』記念講演・シンポジウム資料集　財団法人瀬戸市文化振興団埋蔵文化財センター　2006 年

て増加し、18 世紀前期には大坂城跡と比率値が類似するまで増える。近畿以外でも小倉城跡（第 160 図）や広島城跡（第 115 図）などで 17 世紀後期から増加するが、それ以外の遺跡では四日市遺跡（第 121 図）の状況が示すように産地別組成では依然として肥前陶器が主体で、近畿のような肥前磁器の増加傾向がみられない。したがって、近畿以外の地域では広域に流通はするものの都市部に限られ、17 世紀後期～18 世紀前期においても近畿の大都市を中心に、城下町から集落に至るまで大量に流通したことがわかる。

この状況を肥前磁器の窯跡で見てみると、17 世紀初頭までの窯跡では焼成室の規模は横幅・奥行は３m以内のものが多かったが、17 世紀前期～中期にかけて山辺田１号窯跡では横幅３m程度、奥行２～３mと窯の規模拡大のためか平面形が方形から長方形に変わり始める[5]。また、装飾も古九谷様式にみられる色絵技術を始めとする中国技術の導入が行われ、品質の高い製品を大量に生産することが可能となる。これは中国の明清の王朝交替に伴う内乱による中国製磁器の輸出が減少したことにより、それに替わる製品としてアジア、ヨーロッパ各地へ輸出されるようになったためである。しかし、貞享元年（1684）の清朝の国内統一により、海外貿易が解禁されるとその状況は一変し、次第に海外への輸出量は減っていく[6]。

17 世紀後期～18 世紀前期の窯跡をみると、窯構造は規模がさらに拡大しており、海外輸出の減少による打撃は大きかったが、市場を国内に転じた。窯跡では品質の分業化し、有田町では高・中級品、長崎県波佐見町周辺では中級品から量産品の生産を行っている。これら量産品を主に生産する窯跡の登場は、明らかに庶民層向けの市場を狙う意図があったと察しえ、これは市場を海外から国内に移行した現れとみることができる。したがって、17 世紀中期～18 世紀前期に近畿を中心にみられた肥前磁器の増加は、生産地でもそれをターゲットとして生産体制を整えさせたことと一致する。

18 世紀後期～19 世紀前期に至ると、肥前磁器の分布圏はさらに広がる（第 195 図）。前代では近畿以外の地域では小倉城跡や広島城跡などの城下町跡に集中したが、四日市遺跡や小籠遺跡などの町屋跡や集落跡でも、産地別組成で肥前磁器の比率が 50～60％まで上昇する。その主体なのが「くらわんか手」と呼ばれる量産品の碗・皿で、これが広域かつ大量に流通したことがわかる。また、大坂城跡や京都などの近畿の大都市や明石城武家屋敷跡などの城下町では調度具は前代から一定量出土したが、本時期には伊丹郷町遺跡や兵庫

[5] 有田町教育委員会『有田の古窯 - 町内古窯跡群詳細分布調査報告書　第 11 集 - 』1998 年
[6] ２と同じ。

津遺跡などの町屋や中百舌鳥遺跡などの集落遺跡でも神仏具・化粧具などの受容が増え、近畿では食膳具以外の流通量も増える。しかし、近畿以外の地域では城下町跡では近畿と同じ様相であるが、それ以外の遺跡で調度具が増加するのは 19 世紀中期まで待たなければならない。

肥前磁器の窯場でも 18 世紀前期と比べると、窯の分布圏がさらに広がりをみせ、窯もさらに拡大し、量産品を主に生産する波佐見町の長与皿山窯跡では全長 115m、焼成室約 25 室にも及ぶものが登場するなど[7]、生産規模がさら拡大したことがわかる。また、これら量産品を生産する窯跡では、タコハマを使用した天秤積みが導入され一度に大量の製品を生産することが可能となる。これは言うまでもなく、本時期に近畿以外の町屋跡や集落跡に至るまで肥前磁器の受容が拡大した影響によると考えられる。

このように、流通①は 16 世紀末～17 世紀前期は多産地みられたが、それ以降は肥前陶器・肥前磁器の食膳具が主体であった。これらの拠点は江戸時代を通して大坂城跡や京都などの近畿の大都市を中心とし、17 世紀後期以降は大都市周辺の城下町から集落を含む近畿全体を主とし、西日本へ流通が展開されたと考えられる。

2　中規模流通について

本類型に属するものとして肥前陶器、堺・明石焼、京焼系陶器がある。まずは肥前陶器の調理具、貯蔵具が挙げられる。主な器種は擂鉢と甕である。その分布圏をみると日本海沿いの遺跡を中心に出土し（第 197 図）その状況は小倉城跡（第 160 図）や博多遺跡では、擂鉢は上野・高取焼が独占するが（第 163 図）、甕は両遺跡で肥前陶器が 40%と高い比率を示す（第 164 図）。中国地方の日本海沿いに位置する米子城跡では擂鉢は肥前陶器擂鉢 71%、中国在地陶器擂鉢 18%（第 130 図）、甕については肥前陶器 81%と大量に流通したことがわかる（第 131 図）。

これら地域の中世では備前焼の擂鉢・甕が主体であったが、16 世紀末～17 世紀前期には肥前陶器に主体が移行されたことになる。この要因の一つとしては、武雄市甕屋 4 号窯跡の発掘調査で擂鉢・甕などを専業的に焼かれていたことがわかっており、本時期には大型製品の大量生産が整ったことになる[8]。さらに、肥前陶器の食膳具が日本海を利用した東回り航路で多量に日本各地へ流通されたことが各遺跡の出土状況からわかっており、おそ

---

[7] 中野雄二「江戸後期における波佐見諸窯と長与皿山窯の磁器生産」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通　九州編』第 16 回　九州陶磁学会　資料　九州陶磁学会　2006 年

[8] 東中川忠美「陶器の編年　4．壺・甕」『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会 10 周年記念』九州陶磁学会　2000 年

らくそれと共に流通された可能性が高いと思われる。また、広島城跡では 18 世紀前期まで擂鉢・甕の中心であることから（第 118・119 図）、中国地方の瀬戸内海沿いの遺跡でもその流通圏が及んでいたことがわかる。

次に 18 世紀前期以降に各地で出現する堺・明石焼擂鉢であるが（第 198 図）その状況を見てみると地元近畿はもちろんのこと中国・四国・北九州の瀬戸内海沿いの遺跡を中心に分布することから、海上交通を利用して運ばれたことがわかる。その出土状況は、各地で出現と同時期に高い比率を示し、さらに備前焼や丹波焼、信楽焼、上野・高取焼などの生産地に近い遺跡でも出土する。出土遺物から価値的な立証は難しいが、他産地の擂鉢と比べると、焼成温度が低いためか軟質であり、作りも粗雑である。そのため低価格で販売されたと想定でき、それによって他産地と競合でき、市場を広げていったのではないだろうか。

最後に京焼系陶器の状況は、18 世紀前期以降に近畿・四国・中国・北九州の瀬戸内海沿いの遺跡で調理具の土瓶・土鍋類が流通する（第 199 図）。このうち近畿は 18 世紀中期以降急速に増加し、この影響により産地別組成で肥前磁器と拮抗するほど高い比率を示す。また、近畿以外の地域でも土瓶と灯火具が高松城跡・広島城跡などの城下町跡で多く、その状況は近畿ほどではないが、肥前磁器に次ぐ高い比率を示す。その一方で町屋跡や集落跡での例が少ないのが特徴で、瀬戸内海沿いの城下町跡を中心に展開していたことがわかる。これら以外に色絵碗もある。色絵碗は煮沸具や調度具より広域に出土例がみられ（第 200 図）中国の日本海側の遺跡や佐賀県の西中野遺跡や長崎などでも出土する。また、京焼系陶器の出土状況は肥前陶器や堺・明石焼と異なり、近畿では地域や遺跡の性格に関係なく出土するが、それ以外の西日本での主な流通先は城下町跡や長崎に集中し、肥前陶器・堺・明石焼とは違う流通が察しえる。

京焼系陶器碗については、碗の用途と関係すると考えられる。長佐古真也氏の研究では京焼系陶器は喫茶碗として使用された可能性が高いと述べられており[9]、出土状況は喫茶習慣の浸透とも関係するのではないかと思われる。近畿以外の地域で土鍋は流通せず土瓶が多く出土することからもそれを裏付け、セット関係にあったとも推測きる。

これに関係するのが火鉢・焜炉である。土瓶は絵図や文献資料から竈や囲炉裏での使用よりは火鉢や焜炉などで煮沸される例が目立つ。また、出土遺物の土瓶の底径と焜炉・火鉢の火口径、器高に適応関係がみられ、双方に製作過程から合致するように作られたと考

[9] 長佐古真也「日常茶飯事のこと - 近世における喫茶習慣素描の試み - 」『江戸文化の考古学』吉川弘文館 2000 年

えられている[10]。火鉢や焜炉は竈や囲炉裏のように一定の場所を要せずとも使用できる。特に農家と違い都市部では大きな屋敷で竈を要すことは可能であるが、中小規模の屋敷は小規模もしくは共同で設置される場合が多い。ただ、江戸中期から後期に至ると大坂や京都などの大都市では人口増加により長屋のような小規模な屋敷が増えたことにより火鉢や焜炉が普及したことが出土遺物の量比からも明らかである。また、近畿では土瓶以外に土鍋も多く出土する。それは酒の庶民化、料理のバリエーションが増えたことが江戸後期の料理本から窺え、土瓶・土鍋類などの調理具の急増はそれとも関係すると考えられる。

このように、京焼系陶器の碗・煮沸具は近畿を中心に西日本の城下町に多く流通し、集落で少ないのは都市的な生活習慣の受容の違いによって流通差が現れたと思われる。

３　小規模流通について

本類型に属するものとして、16 世紀末～19 世紀前期にみられる信楽焼、丹波焼、上野・高取焼、18 世紀前期に出現する中国在地陶器、京焼系陶器がある。これらは生産地を中心に近隣数国に流通する（第 201 図)。その分布圏を見てみると、丹波焼、信楽焼の窯場がある近畿では、丹波、摂津、河内、和泉などの瀬戸内海沿いは丹波焼が中心で、信楽焼は山城、大和、近江などに広がっている。丹波焼、信楽焼の出土状況は類似し、主な製品は擂鉢・甕である。伊丹郷町遺跡を例にあげると、本遺跡は丹波焼の生産地に近いためか 16 世紀末以前から一定量出土する。16 世紀末～17 世紀前期は第 51 次Ｂ－２－１区ＳＫ479 をみると擂鉢組成は丹波焼 100%、甕組成は備前焼 100%と器種によって産地が異なる（第 17・18 図)。同時期の第 97 次Ｄ－７区 SK622 では擂鉢組成は備前焼 80%、丹波焼 20%、甕組成は丹波焼 75%、備前焼 25%とあり、両産地が競合している。それが 17 世紀中期～17 世紀後期とする SK66 では擂鉢・甕とも丹波焼のみとなる。擂鉢は 18 世紀前期まで、甕は 19 世紀前期まで続き、それに加えて擂鉢・甕以外の製品も一定量出土する、この状況は窯場周辺の遺跡では類似した様相を示す。

このように 17 世紀前期までは備前焼と競合したが、17 世紀中期以降にはその市場を独占することから、本時期には広域流通品を受容するのではなく、近隣の産地でその受容を満たせた現われとみることができる。その背景の一つとして、生産地での変化もあると思われる。

---

[10]日下正剛「問題提起・徳島」『第５回　四国城下町研究会　四国と周辺の土器Ⅱ－火鉢・焜炉類にみる流通と生活形態－』発表要旨・資料集　四国城下町研究会 2003 年

信楽焼は16世紀末～17世紀初頭とする宮町三－一号窯跡の発掘調査で、窯構造は双胴式の窖窯であることがわかっている[11]。それが17世紀前期と考えられる牧101号窯跡の踏査で、有段斜挟間の登窯とわかり、この時期に登窯が導入されたと考えられる。丹波焼も16世紀中期～17世紀代に操業した下立杭古窯でトレンチによる確認調査が行われ、17世紀前期～17 世紀中期に窖窯から単室登窯に変化し、さらに、17 世紀中期以降には床を張り直し、火床を設けるなどの窯構造に変化する[12]。このような登窯を導入したことにより、品質のよいものを安定して生産することが可能となったと思われ、17世紀中期以降に消費地でみられる状況は、広域流通品でなく近郊の製品でその受容に対応できるようになったと見ることができる。

一方、上野・高取焼は江戸時代を通して、18世紀前期に出現する中国在地陶器などは擂鉢・甕が多く出土するが、碗・皿などの食膳具や灯火具や神仏具などの調度具まで豊富な製品がみられ、丹波焼、信楽焼とは器種組成が異なる。上野・高取焼、中国在地陶器の分布圏を見てみると（第 201 図)、前者は北九州を中心とし、中国の周防、安芸に広がる。一方、中国在地陶器は中国地方の日本海側を主体とし、周防、安芸などの瀬戸内海沿いの遺跡でも出土するが、備後、備中、備前など備前焼の窯場に近接する地域には及んでいない。

上野・高取焼、中国在地陶器の出土状況は類似し、擂鉢・甕が主に流通する。小倉城跡を例にみると、17世紀後期～18世紀前期とする京町遺跡１区２号瓦溜では（第163～166図)、食膳具は５％（皿２％、鉢３％)、調理具85%（擂鉢20%、瓶65%)、貯蔵具は36%（壺)、調度具15%（壺５％、神仏具10%）と、流通の主体が調理具・貯蔵具である。上野・高取焼の周辺遺跡でも16世紀末までは備前焼が多く出土していた。しかし、16世紀末以降、本産地が開窯すると産地周辺で上野・高取焼が増加し始め、17世紀中期には高い比率を示す。したがって、丹波焼や信楽焼と同様に窯場近郊で、その市場を確保したと考えられる。また、上野・高取焼は調理具・貯蔵具だけではなく多種の製品も流通したことが小倉城跡の状況からもわかる。この様相は中国在地陶器も同じである。

京焼系陶器は、先の産地と主製品が異なる。流通②に属する碗・煮沸具以外に、灯火具・文具・神仏具などの調度具も出土する。伊丹郷町遺跡を例に挙げると、17 世紀後期～18世紀前期とする第 165 次調査焼土１の産地別組成では京焼系陶器 0.8%と僅かで（第 14

---

[11] 畑中英二『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版　2003年
[12] 篠山市教育委員会『下立杭古窯範囲確認調査概要報告』2004年

図)、食膳具の碗が出土する（第16図)。続く第123次D－７区ＳＫ102は18世紀前期～18 世紀中期の遺構では、産地別組成で２％と比率を上げ、前代から出土した碗に加えて、調度具の火鉢が新たに出土する。18世紀後期～19世紀前期に至ると一気に出土量が増え、第51次B－２－２区SK722では29.8%まで上昇する。器種組成も食膳具の碗、調理具の煮沸具、調度具の灯火具・神仏具・文具・餌鉢・植木鉢などが出土し、前代より器種が増え、ことに文具・餌鉢・植木鉢などの嗜好品が増加する。このように多種類が出土するのは上野・高取焼や中国在地陶器と共通する。

京焼系陶器の窯は、信楽町周辺に 18 世紀中期から増える。窯構造は、発掘調査例がないため構造は不明であるが、散布資料の特徴から連房式登窯と考えられる[13]。製品は18世紀前期とする牧 26 号・９号窯跡などから小杉碗・丸碗などの碗類や灯火具が出土する。さらに、18世紀後期から神仏具を生産し、18世紀末には一気に生産量が増える。牧13－１、２号窯跡、勅旨５号窯跡では先に上げた器種以外に餌鉢や香炉などの調度具なども増え[14]、器種にもバリエーションがみられるなど、伊丹郷町遺跡の変遷と共通する。

また、近畿では18世紀後期～19世紀中期にかけて大坂城跡や京都などの都市周辺に陶器窯が開窯する。例えば大坂城近郊では高槻市の古曾部焼（第 196 図‐16)、貝塚市の音羽焼（第196図‐17）などである。これらの窯跡では土瓶・土鍋などの調理具を中心とし、それに碗・皿などの食膳具や灯火具・神仏具などの調度具などを生産する。これらの窯跡も本格的な発掘調査がされていないため詳細な特徴は不明であるが、窯道具や施釉技術の特徴から、京焼の技術が導入されたと考えられる。本時期に京焼系陶器窯が開窯するのは近畿における京焼系陶器の受容に対応するためと考えられる。

以上のように、17世紀中期以降、各産地で生産技術が改良されると、周辺地域でその市場を独占することがわかった。

４　嗜好品流通について

本類型に属するものとして、16 世紀末～17 世紀前期は瀬戸美濃陶器の志野焼や織部焼などの「桃山陶器」と呼ばれる茶器・懐石具、17 世紀後期～19 世紀前期までの清朝磁器やベトナム磁器などの貿易磁器などである。

まず、瀬戸美濃陶器であるが、西日本の各遺跡の産地別組成をみると16世紀末～17世

13　畑中英二『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版　2003年
14　13と同じ。

紀前期の西日本では施釉陶器の主体は肥前陶器となり瀬戸美濃陶器は減少する。しかし、志野焼・織部焼鉢などの「桃山陶器」に分類される茶器や懐石具は（第 202 図）、大坂城跡、京都などでは多く出土するが、瀬戸美濃陶器がほとんど出土しない近畿以外の西日本においては限られた遺跡のみ出土する。四国では高松城跡や高知城跡、中国は広島城跡、米子城跡、北九州では小倉城跡や長崎など城下町跡に集中し、集落跡や町屋跡からの出土例はごく僅かである。これら城下町跡の多くは武家屋敷跡に集中し、共通する意図が察しえる。

小倉城新馬場跡１号井戸を例にみると、産地別組成は（第 160 図）、土師質土器 76.8%、瓦質土器 1.2%、備前焼 0.75%、丹波焼 0.05%、瀬戸美濃陶器 0.7%、肥前陶器 1.3%、上野・高取焼 19%、中国製磁器 0.2%と、瀬戸美濃陶器は他の産地と比べて比率が低い。器種は食膳具の皿・鉢、調度具の香炉・瓶類である。皿以外は「桃山陶器」に分類されるものである。志野焼鉢、織部焼の脚付き香炉や灰釉の鉢など嗜好品と考えられるものが多い。また、共伴遺物をみると、肥前陶器や上野・高取焼の量産品の食膳具が多く出土するが、このうち上野・高取焼は茶入れ・天目碗・鉢など茶器・懐石具と想定できるものである。したがって、武家屋敷跡では茶器や懐石具の受容により本来の流通圏を越えて特定の器種が流通したとみることができる。

次に清朝磁器やベトナム磁器などの貿易磁器がある。貿易陶磁器は 16 世紀末～17 世紀前期では長崎を始め大坂城跡や京都などの都市部を中心に出土していた。それが 17 世紀中期以降、長崎を除く西日本の遺跡では激減していく。それは正保元年（1644）の中国の明清の王朝交替に伴う内乱により中国磁器の輸出が減少したためと考えられる。そうした中で、17 世紀後期～18 世紀前期に長崎、大坂城跡、住友銅吹所跡などで貿易陶磁器が多量に出土する。

住友銅吹所跡の享保９年（1724）の妙知焼の火災資料をみると、施釉陶器・磁器の産地別組成では中国製磁器 58%、肥前磁器 37%、京焼系陶器３%、その他国産陶器 1.8%と、中国製磁器が半数以上を占める（第９図）。主な器種は明末清初の大皿や鉢も含むが、大半は清朝磁器の色絵の食膳具で、しかも組物で出土する。この清朝磁器色絵製品が出土するのは長崎のみで、特別なルートで持ち込まれた可能性が高い。また、肥前磁器も金襴手に分類できる最高級品であった。本時期は住友家が銅輸出や海外商品の輸入を開始した時期である。貿易にあたっては出島を介したのはいうまでもなく、それに関係するのか元禄 10

年（1697）にオランダ商館長が銅吹所を参観したことが、商館長日記に記されている[15]。このような特別な入手手段をもち、さらに経済的な発展により最新の最高級品を購入できたと考えられる。

また、住友銅吹所跡と同じ大坂城跡内の道修町の町屋跡（OJ92－18 地点）でも先の例ほどではないが貿易陶磁器が出土し、この周辺でも高級陶磁器の中に清朝磁器が僅かにみられる。このように経済力のある遺跡では貿易陶磁器が流通していた。

５　内容物による流通について

本類型に属するものとして、「保命酒」備前焼徳利や「小倉名物三官飴」清水焼壺（小倉）など、これら以外にも多種ある。ただ、出土量は日常的に用いられたものではなく、土産や嗜好的な意味で流通したと思われる。

「保命酒」は、江戸時代は備後、現在の広島県福山市鞆の浦で販売されたもので、万治２年（1660）に中村吉兵衛吉が醸造したと伝えられている[16]。漢方を入れたいわゆる薬種酒である。陶器の徳利を使用されたことは元禄から享保年間以降と考えられ、備前焼徳利を使用されたのは文献・伝世品資料からわかっている。「保命酒」の流通の詳細は不明であるが、生産にあたり福山藩の庇護を受けた時期もあり将軍家や諸大名への贈答品とされたこともわかっている[17]。また、鞆の浦は瀬戸内航路の中継地であることからこれを介して流通したことは察しえる。第 203 図は備前焼の「保命酒」の分布状況であるが、西日本各地で出土し、18 世紀以降、備前焼がほとんど出土していない日本海側でも出土しており、流通⑤によって流通したことがわかる。

第２節　土師質土器皿の流通について－伊丹郷町遺跡を例にして

西日本の土器・陶磁器の出土状況から、土師質土器流通は陶磁器流通と異なり、小規模に流通すると考えられる。土師質土器は、中世の京都産土師皿や大和産火鉢などは広域に流通したことが全国各地の遺跡での出土状況からわかっている。それら以外の製品については、陶磁器窯と異なり簡素な窯で焼成できるため各地域に存在し、その受容を色濃く反映した製品を生産する。そのため流通範囲は陶磁器より狭いことは察しえる。ここでは伊丹郷町遺跡の土師質土器皿の出土状況からその様相を探ってみる（第 204 図）。

---

[15] 今井典子「住友長堀銅吹所略史」『住友銅吹所跡発掘調査報告』財団法人　大阪市文化財協会　1998 年
[16] 岡本順夫「備前焼と鞆保命酒」『備前焼歴史フォーラム江戸時代の暮らしと備前焼』備前市教育委員会 2008 年
[17] 16 と同じ。

１　伊丹郷町遺跡出土の土師質土器皿について

土師質土器皿は、古代から祭祀・食膳具として使用される。そのため、遺跡から多く出土し、各時代・遺跡において時期や遺構の性格を示すものとして、研究対象の上位に挙げられる。伊丹郷町遺跡でも川口宏海氏[18]、瀬川眞美子氏[19]が型式分類され、その変遷を検討されている。このうち川口氏の分類は有岡城期（戦国時代）から伊丹郷町期（江戸時代）の特徴を網羅され、今回はこの川口氏の分類（以下、川口分類と略す）と最新の資料を含めて再度分類した（第 205 図)。

江戸時代の土師質土器皿について川口分類は、大筋の調整は共通することから、胎土の色調、器厚によって２型式４類に分けられ、詳細は以下の通りである。

IT・１型式－器壁の厚さが 0.4cm 前後。胎土は精良で、にぶい橙色 7・5YR7/３を呈する。器高は低く、口縁部は内湾する。外面口縁端部はヨコナデ調整、底部は指頭圧調整、底部は指頭圧および手掌圧調整、内面口縁部はヨコナデ調整、底部は一方向もしくは不定方向のナデ調整を施す。

A 類－口径 8.0cm 前後

B 類－口径 12.0cm 前後

IT・２型式－胎土は精良であるが、断面が層をなし、表面が薄くはがれ落ちることが多い。色調は明褐灰色 7.5YR7/2 を呈し１型式より僅かに黒い。調整は１型式と同じである。

A 類－口径 11cm 前後、器壁の厚さ 0.4cm 前後

B 類－口径 13cm 前後、器壁の厚さ 0.7cm 前後

この川口分類の報告後、資料が増加しており新たな知見を加える。まず、IT・１型式であるが、川口分類では２類に細分され胎土の色調や調整は同じであるが口径６～７cm 前後のやや小型のものを分類した。瀬川氏の分類ではＡ３類と呼ばれる一群で、瀬川氏は有岡城期から続くものと提示されるが、17 世紀代にこの法量に類似するのは一例のみで、かなり無理がある。多く出土し始めるのは 17 世紀後期以降で、元禄 12 年（1699）・元禄 15 年（1702）の火災層およびその関係遺構から出現し、18 世紀後期以降に増加すると考えられる。

他にはロクロ成形によるものがある。胎土は精良で、色調は赤褐色を呈する。底部に右

---

[18]川口宏海「土師質土器皿の分類について」『有岡城跡・伊丹郷町遺跡Ｖ』伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1997 年

[19] 瀬川眞美子「土師器皿、調理具③　焙烙について」『第１回　伊丹郷町研究会大会　伊丹郷町遺跡の陶磁器の様相』発表要旨 2003 年

回転の糸切り痕を残す。瀬川分類では、18 世紀前期に軟質施釉陶器皿でいわゆる「柿釉灯明皿」と呼ばれるものの無釉製品を同類と位置づけている。胎土や外面調整からいくつかに分かれる。第 216 次調査区では焙烙窯を検出し、同時に素焼きの皿や鉢が生産されたことがわかっている[20]。このことからロクロ成形によるものも一製品として存在すると考えられる。

このことから、川口分類に本資料を追加すると以下の通りになる。

IT・１型式－器壁の厚さが 0.4cm 前後。胎土は精良で、にぶい橙色 7・5YR7/３を呈する。器高は低く、口縁部は内湾する。外面口縁端部はヨコナデ調整、底部は指頭圧調整、底部は指頭圧および手掌圧調整、内面口縁部はヨコナデ調整、底部は一方向もしくは不定方向のナデ調整を施す。

A 類－口径 6.0～7.0cm

B 類－口径 8.0cm 前後

C 類－口径 12.0cm 前後

IT・２型式－胎土は精良であるが、断面が層をなし、表面が薄くはがれ落ちることが多い。色調は明褐灰色 7.5YR7/2 を呈し１型式より僅かに黒い。調整は１型式と同じである。

A 類－口径 11cm 前後、器壁の厚さ 0.4cm 前後

B 類－口径 13cm 前後、器壁の厚さ 0.7cm 前後

IT・３型式－胎土は精良で、赤褐色を呈する。成形はロクロ成形で、B 類には外面回転ヘラケズリを施す。

A 類－口径 6.0～7.0cm 前後

B 類－口径 15cm 前後、器高 1.5cm 前後のもの

以上、最新の調査により１型式、１類を追加した。

２　分布状況

先に型式分類した土師質土器皿を時期別に分布状況を示したのが第 206 図から第 208 図である。では順に見てみる。

16 世紀末～17 世紀後期（第 206 図）

IT・１型式のみである。16 世紀末～17 世紀前期は B 類が広くみられA類は少ない。A 類は本町通りより西側の町屋が建ち並ぶ宮ノ前地区に集中する。

[20]伊丹市教育委員会『伊丹市埋蔵文化財調査報告書　震災復旧・復興事業に伴う発掘調査』2005 年

17 世紀後期～18 世紀前期（第 207 図）

この時期も IT・１型式が多いが、新たに IT・２型式・３型式が出現する。分布状況は IT・１型式が多く、特に B 類が広く分布する。C 類は本町通りや三軒寺周辺に、A類も前代に引き続き宮ノ前地区に集中しており、タイプによって分布範囲が異なる。本時期から出現する IT・２型式・３型式は出土例が少なく、出土地点も点在している。

18 世紀後期～19 世紀前期（第 208 図）

IT・１型式 B 類は本時期でも広範囲に分布し同型の C 類も重なる。A類は前代と様相に変化ない。IT・２型式は、A 類は少ないが広く点在し、B 類は本町通りの東西、三軒寺など通りに面したところに目立つ。IT・３型式は A 類が広く点在するが、B 類は少ない。

このように IT・１型式が江戸時代を通して伊丹郷町全体に分布し、そのうち口径が８cm・12cm 前後のものが主体であった。その一方、IT・２型式や IT・３型式は 18 世紀後期以降に急増し、IT・２型式は広く点在するが、IT・３型式は限られた地点に集中していた。

IT・２型式の出土状況については川口氏が酒蔵からの出土例が目立つと述べられている。川口氏の発表後、酒蔵が多く点在した本町通りを挟んだ中之町や大手町での発掘調査が進み、18 世紀後期以降の遺構からは IT・２型式が多く出土する。これは広い酒蔵内で明かりを取るために大型でやや深みのある皿が受容されたと考えられる。

IT・３型式は出土例が少なかった。A 類は宮ノ前地区で出土し、大きさも IT・１型式 A 類と変わりなく、出土地点も類似することから併用されていたと考えられる。一方、B 類はさらに少ない。その一つに第 216 次調査区で検出した窯から出土し、皿には「どうとんぼり　楽焼所　下大和ばし南詰」と大坂への市場を意識するもので、地点も大坂へ続く街道沿いであることから、流通の中心は伊丹郷町以外だったかもしれない。

このように、時代の経過と共に多種類の大きさのものが受容される。それは 17 世紀後期～18 世紀前期は通りに面した町屋でみられ始める。伊丹郷町では主幹通りに面して敷地の広い町屋や商家、酒蔵が建っていたことが絵図資料や発掘調査でわかっている。これらからは IT・１型式 A・B 類が出土する地点や、Ⅰ型式 A・B と IT・２型式を含む地点などもあり、大きさにバリエーションがみられ、用途によって使い分けたことが察しえる。その様相は 18 世紀後期～19 世紀前期には郷町全体に広がりをみせる。

３　伊丹郷町遺跡周辺の土師質土器皿

伊丹郷町遺跡の様相をみたが、次に周辺遺跡の様相を見てみる。

麻田藩陣屋跡は豊中市蛍池中町に所在し、伊丹郷町遺跡の東北約３キロに位置する（第203図)。本遺跡の土師質土器皿の色調は、江戸時代を通して灰白色 10YR８/２に集約される（第 208 図)。17 世紀初頭はロクロ成形（１）と手づくね成形でどちらも口径 11cm（２）が中心である。17 世紀中期からロクロ成形はみられなくなり、手づくね成形のみとなる。タイプは器形から２タイプに分かられるが、大きさは共通して口径９cm、10cm（３）、12cm（４）のものである。18 世紀前期に至るとロクロ成形が再び出現し、手づくね成形と併用する。また、18 世紀前期の手づくね成形の中には手掌圧調整のものが含まれる。大きさは手づくね成形は口径８cm、10cm、ロクロ成形は口径７cm（５）に分かれる。18 世紀後期には手づくね・ロクロ成形の他に外面をヘラケズリ調整する皿が加わり、大きさは８cm、10cm（６）である。ちなみに手づくね成形の皿は口径 11cm 前後、ロクロ成形の皿は６cm（７)、８cm（８)、10cm（９）と手づくね成形の皿より小型である。この傾向は 19 世紀代まで続く。

尼崎城跡は兵庫県尼崎市に所在し、伊丹郷町遺跡の南約８キロに位置する（第 203 図)。城内小学校地点は尼崎城の本丸にあたる。本地点からは 16 世紀後期～幕末までの土器・陶磁器が出土した[21]。

本遺跡の土師質土器皿の色調は、江戸時代を通して橙色と白橙色系に集約される（第 209 図)。16 世紀後期～17 世紀前期は手づくね成形のみ。胎土の色調は白橙色を呈し、内面にヨコナデ調整、外面口縁に沿ってナデを施す。大きさは７cm 前後（１）と 13cm（２）程度で前者は灯火芯を残すものは少ない。この他、ヘソ皿タイプがあり口径は８cm（３）を呈する。17 世紀前期～17 世紀後期は手づくね成形のみ。胎土の色調は白橙色を呈し、内面はヨコナデ調整、外面には指頭圧調整を施す。大きさは 11～13cm（４～６）で灯火芯を残すものが多い。18 世紀前期も手づくね成形のみ。胎土は白橙色を呈し、口縁部内外面は口縁部に沿ってナデ調整、外面体部はナデ調整、内面は見込みにヨコナデ調整を施す。大きさは 11cm 前後（７）と 15cm 前後（８）で灯火芯をもつものが多い。18 世紀後期～19 世紀前期は手づくね成形とロクロ成形がある。手づくね成形の皿は、胎土の色調は白橙色を呈し、内面はヨコナデ調整、外面には指頭圧調整を施す。大きさは８～10cm で灯火芯を残すものが多い（９)。ロクロ成形の中には内面にナデ、外面に回転ヘラケズリが残るものもある。大きさは 9.5cm 前後、器高は低く見込みが広いものと、口径 11cm 前後、器

[21]尼崎市教育委員会『尼崎市埋蔵文化財年報　平成８年度(２)・９年度・10 年度(１)』2007 年

高 2cm に分かれ、先のタイプより深みがあるもの。もう一つは口径 15cm 前後で器高が低いものに大別される（10）。これらは灯火芯を残すものが多い。19 世紀後期は、ロクロ成形が中心で手づくね成形のものは少ない。胎土の色調は橙色系を主体とし、大きさは 8.5cm 前後で器高は低く見込みが広いタイプのものがある（11）。

このように伊丹郷町遺跡周辺の遺跡から出土する土師質土器皿は、伊丹郷町遺跡のものとは成形が手づくね成形を基本とすることは共通するが、手掌圧調整された皿は麻田藩陣屋跡で 18 世紀前期から出土するが僅かであった。また、胎土の色調は異なり、技術的系譜もみられないことから各遺跡に近接したところで独自に生産され、小規模に流通したと考えられる。

また、時代は異なるが伊丹郷町遺跡に近接する森本遺跡（伊丹市森本）では畑から近世陶磁器を採取するが、手掌圧調整された皿はなく。これらのことから、伊丹郷町遺跡で出土する皿は主に町内を中心に流通したと考えられる。

以上、伊丹郷町遺跡出土の土師質土器皿の様相を見てみた。先にも述べたが今回分類したものは伊丹郷町内で数ヶ所以上出土するもので、これ以外にも単発に出土するものも多種あるが、基本的には口径８cm・12cm 前後の手づくね成形の皿が広く分布していた。先には述べなかったが土師質土器皿の多くは灯火芯を残すものが多く、主に灯明皿として使用されたと考えられ、灯火具としての傾向が多くなるのは 17 世紀前期以降である。

このことから、伊丹郷町遺跡の土師質土器皿は口径８cm 前後の灯明皿を主に受容されることがわかった。その一方で、商家や酒蔵などが建ち並ぶ地域では、17 世紀後期～18 世紀前期以降、大きさにバリエーションがみられ始め、18 世紀後期～19 世紀前期には器形にもバリエーションが増え、その組合せに違いはあるが町屋全体で器形・大きさにバリエーションがもたれる。伊丹郷町遺跡の状況が近世の土師質土器皿の様相を示すわけではなく、多くある例の一つだと思われる。たとえば奈良県の奈良町遺跡では口径 11cm 前後、８cm 前後のものに大別され、それが江戸時代を通して大量に出土し、その組成に大きな違いがみられない。皿の多くに「春日大社」と墨書したものがある。奈良町は春日大社の門前町であり、大きな影響があったことは言うまでもない。土師質土器皿は灯火具として使用した以外に神具として使用されたのであろう。

このように土師質土器皿の出土状況は、狭い範囲で分布し、その受容方法も多種に及ぶことがわかった。

第３節　西日本における土器・陶磁器流通の特徴

西日本の土器・陶磁器の出土状況から、陶磁器流通と土師質土器流通を見てきた。ここではこれら流通の変遷をまとめる。

各地の産地別組成から西日本の陶磁器流通の形態は５類型あることがわかり、これらの変遷を見てみると、16 世紀末～17 世紀前期の西日本の流通の主体は流通①である。地域に関係なく肥前陶器を中心とする施釉陶器の食膳具や備前焼の擂鉢・甕などが広域に流通する。これを言い換えるならば西日本で共通した陶磁器流通が行われたといえる。ただ、これらは大坂城跡や京都などの近畿の大都市では、西日本の他の遺跡よりいち早く新器種が出現し、受容量が増加することから近畿の大都市が流通の拠点となっていたと見ることができる。

近畿の大都市は古代の難波宮、平城京、平安京、近世の大坂城跡など古代から近世までの政治の中心地である。大都市には全国各地から租税を中心とした物資が運ばれ、それに伴い瀬戸内海を中心とする海上交通、淀川、大和川などの河川交通、琵琶湖を利用した湖水交通、山陽道や東海道などの街道が古くから整備されていた。これにより、近畿は他の地域に比べると流通経路が整っていたことも要因の一つと考えられる。

それ以外に本時期には丹波焼、信楽焼などの窯場近郊に流通圏を形成する流通③、「桃山陶器」の懐石具・茶器が西日本の武家屋敷跡で多く出土する流通④も存在した。

土師質土器は広域に流通する製品はなく、遺跡内もしくは近在に分布し、その範囲は流通③より狭いと考えられ、この様相は西日本で共通する。

16 世紀末～17 世紀前期の陶磁器流通は、近畿の大都市を中心に広域流通品が西日本の各地に流通する。その一方で、近郊に窯場がある場合はそれが流通し、経済力があれば本来の流通圏を越えるものもあった。また土師質土器は陶磁器より狭い流通圏を形成していた。

17 世紀中期に至ると、流通形態が変わってくる。まず、擂鉢・甕などを主製品とする流通③が各地で小規模な流通圏を形成し、その市場を独占する。その影響で前代まで広域に流通した備前焼はその範囲を狭め、本時期には流通③に属される。これは 17 世紀前期～中期に各生産地で技術的改良がされたことが大きく、良質の製品を安定して生産できる体制が整ったため、広域流通品ではなく近郊の製品でもその受容を十分に満たせるようになった現われとみることができる。

さらに、流通①は、17 世紀中期以降では肥前陶器・肥前磁器の食膳具に限られる。これ

らは西日本において競合する生産地がなく、特に磁器生産をおこなうのは肥前のみであることも要因の一つと言えるだろう。

17 世紀後期～18 世紀前期に至ると、肥前陶器・肥前磁器の食膳具は西日本の各地へ活発に流通される。特に、近畿では大都市はもちろんのこと城下町や集落に至るまで大量に流通しており、このような状況は他の西日本ではなく、本時期でも近畿を中心に陶磁器流通が展開される。また、丹波焼や上野・高取焼などの流通③は前期と変わらず継続され、新たに中国在地陶器、京焼系陶器が加わり、西日本の窯場近郊で流通③が形成される。

このように陶磁器受容が高まる中で、中規模に流通する堺・明石焼擂鉢や京焼系陶器碗などが出現する。これらの出現は、前代までの広域流通・小規模流通・嗜好品流通以外に、陶磁器の日用器を消費者の受容目的たとえば価格や使用目的による陶磁器流通が開始された現れと考えられる。また、陶磁器流通が変化するなかで、土師質土器は器形にバリエーションがみられるものの、その流通範囲は前期と変わらず小規模に形成し、それ以後も大きな変化はない。

18 世紀後期～19 世紀前期にはさらに複雑となり、肥前磁器の食膳具・調度具はその範囲を広げる。その一方で、流通③は新たに京焼系陶器に属する窯跡が増え、各地で流通③に属する産地が肥前磁器と近接した値を示すなど、大量に流通されるようになる。これは 18 世紀中期まで陶磁器受容が流通①の肥前陶器・肥前磁器の食膳具であったが、本時期にはこれらを主体とするものの、それ以外の器種の受容が高まり、それについては近郊の製品が流通されたためである。

この他に流通②は京焼系陶器の煮沸具、さらに流通④が加わり、受容者のニーズによって陶磁器が流通されるように変化されていった。